

はしがき及び凡例

本書は小山田与清編『松屋外集』のうち、初編二〇巻、二編七編からなる系統を翻刻校合して研究者・江湖好学の志に提供するものである。この系統は全て写本で伝わり、国立国会図書館本、もりおか歴史文化館本（三本）、静嘉堂文庫本があるほか、一部自筆草稿本が早稲田大学図書館本他にある。これらのうち国会図書館本（835―4）を底本として、広本に当たるもりおか歴史文化館本（和1499）を校合して翻刻する。巻ごとに傳存、異同の状況が異なるため、各巻ごとに翻刻紹介することとした。紙幅の都合で書誌解題については別の機会を設けたい。

翻刻の凡例を説明する。まず翻刻は国立国会図書館本の本文に従い、字取り、返り点、捨て仮名字も忠実に翻刻した。割書については原則へゝに本行と同じ文字サイズで示し割書内の返り点も翻刻している。宣命書の場合には本文の通りに記した。字形が不明瞭な字やUnicodeで定義のない字形については通行字体を利用した。行頭の筆の尻による圏点は「○」。和歌に付された庵點は「ゝ」、改丁については表裏ともに「┐」

を付した。校合に際しては本文異同が認められる場合に異同を示し、アラビア数字の文末脚注を付す形で位置を示した。捨て仮名・返り点の異同も大きいが無視した。対校においては、もりおか歴史文化館本を「も」として、「」内に直前の文字との異同を示し、対校本文にその文字がない場合は「ナシ」と記し、底本にない文章が挿入されている場合には（挿入）あるいは（改行挿入）を「」末尾に付している。長文の入れ替えが生じる場合には底本の本文と「Ⅱ」で対校本文の入れ替えを示した。本文の提示には底本と同じ基準で示したが丁数については省略した。国立国会図書館本に見られる朱点などについても脚注で示した場合がある。なお組版における問題により、一部返り点やカーニングに位置ずれが発生してしまっているが、次巻以降の課題とする。附属のCDには本文データ及びフィールドコードを除いたテキストデータを付した。取り扱いには注意せられたい。翻刻の許可を頂戴した国立国会図書館およびもりおか歴史文化館に深く御礼申し上げる。なお、本書はJSPS科研費JP22K13040、JP21J00181の成果である。

令和五年二月二十四日 梅田 径 記

翻刻 松屋外集 卷一

目次

目録	1 頁	第六	7 9 頁	第十二	1 3 1 頁
第一	3 頁	第七	9 5 頁	第十三	1 3 3 頁
第二	3 5 頁	第八	1 0 3 頁	第十四	1 3 7 頁
第三	4 1 頁	第九	1 1 7 頁	第十五	1 3 8 頁
第四	6 2 頁	第十	1 1 9 頁	第十六	1 4 1 頁
第五	7 2 頁	第十一	1 2 8 頁		

松屋外集 一」（外題）

（遊紙一紙）

松屋外集卷之一

目錄

第一印板形木
インハンカタキ

孝謙天皇百万塔

兪良甫

摺形木
スリカタギ

節用集

印佛像
インブツゾウ

第二加和良鎧具足
クワラヨロヒグソク

第三船靈
フナダマ

天地¹

第四標目山月日山」1才
ヘウノヤマツキヒノヤマ

第五豊受宮内宮外宮
トヨウケノ

御餞ミケツモノ 宮號

第六總柱六所大明神一、宮二、宮三、宮四、宮五、宮

六、宮武藏六所分 配宮相模 六所宮

分配 小野路 總社

第七むさ上むせ下₂武藏相模駿河佐泥佐斯

第八羅生門₃ 金札

羅城

第九保元物語作者時代

平家物語作者「1ウ

第十古寫經帙デス簀

忠尊 覺嚴

第十一掃墨ハイズミ

第十二答ル二畠山常操ス書

鷹のもみちに

第十三阿波殿御庭拝見記⁴

第十四つほ⁵／＼

田寶^{デシバウ}

第十五櫻間池

阿波名所」2才

第十六答於澤近嶺^ニ書⁶

(9行白紙)」2ウ

松屋外集卷之一

武蔵多西 平小山田與清稿

越後高閑 平 渋谷永保訂

第一印板形木^{イシハシカタキ}

○續日本記三十の卷へ廿丁左／＼寶龜元年四月戊午の条

に初^メ天皇八年乱平乃發^{ヌチシテ}弘願^ニ令^ム造^ニ三重小塔一百

万基高各四寸五分基經三寸五分露盤之下各置^ニ

根^一本慈^一心相^一輪六^一度茅陀羅尼^ニ至^テ是功畢分^ニ置諸寺^ニ

賜^ニ事^{セル}供^ニ事官人已下仕丁已上一百五十七人爵^ニ各有^{タリ}一^ニ 3才

按に此時の小塔今尚大和國法隆寺夢殿に存^{ノコ}

れり世に散在せるはた法隆寺より出たる也

余二基を蔵せしに一基は三縁山の貫首寶譽

顯了大僧正に貸まゐらせたりしをり大災に

罹^{カヘリ}て烏有^{ムナシク}なりぬ其中に納たる經は端に無垢

淨光經相輪陀羅尼と有て本文は五字廿一行

奥に墨書の甲の字あり今存^{ノコ}れる一基の中な

るははじめに無垢淨光經自心印陀羅尼とあ

りて本文五字廿九行也いつも巻子にて黄

紙に摺たる版本也墨書の甲字は孝謙天皇の」 3ウ

宸筆也といひ傳ふこれ古版⁷の現存物といふ

べし⁸

○走湯山縁起五の卷永觀元年の条に唐國本朝摺

寫本⁹經輪人師述作合東四十餘帙納^ム之云々

按にこは永延二年正月沙門延尋が記文にて

浮たる説にあらず円融院天皇の永觀の比本

朝摺本の製盛に行はれしこと想像すべし

○平基親の新彫選擇集願念佛集序に雖^{トモ}知^ト埋^ム壁^ニ之

誠還貽^ノ彫版^ノ之印^ヲ於戲玄元聖祖五千言令尹早著^ニ

上下之典^ヲ選擇本願十六章門徒將^ニ得^{ント}摺寫之益^ヲ思^フ」 4オ

徳之志古今惟同者歟于^レ時辛未之歲建子之月云

々

按に元禄九年正月沙門義山が跋に吾祖以_二建
曆辛未十一月自_レ撰回_ル洛而平氏序乃是月下旬_ニ
作_{レル也}也とありて順徳院天皇の建曆元年十一月

刊行せし也圓光大師行狀画圖翼賛六十の卷

傳本第十一の条に撰擇集都_ヅ二卷大師月輪殿

ノ請ニ應シテ撰進シ給ヘル事傳文ニ具ナリ

決疑鈔見聞_ニへ良栄_ハ云新彫選擇本願念佛集序云々

此序兵部卿三位平基親作也案_{スルニ}此序並奥書意_ニ4ウ

大師御在生時御弟子等呈_シ修飾_{シテ}刊行之願於大

師_ニ令_ム基親_{ヲシテ}序_セ其顛末_ヲ時建曆元年辛未十一月

也明年壬甲正月廿五日大師入滅門弟住_{シテ}戀慕_ノ

思_ニ一旦為_{シテ}報恩_ノ一旦為_{シテ}流布_ノ同年九月八日刻彫之功

終_{レリト}云々今按_{スルニ}決疑鈔云_ニ建曆年中開板之本_ト一者即

是也其後嘉祿三年絶^ニ板^シ之^ヲ了然^テ經^ニ二十有二年^ニ延

應元年重刻行于世其本跋云延應第一之曆沽

洗第六之天校^{シテ}根源正本^ヲ直^シ展轉錯謬^ヲ即寫^{シテ}印字^ニ

用令^テ流布^{ムト}云々は益疑^テ建曆印本出^{ハカト}於門弟手^{ノニ}反

為^{ナラン}以下^下以^ニ未再治^ト而正本^上見ゆ^ト「5才

○立正安國論に去^ル元仁年中自^リ延曆興福兩寺一度々

經^ニ奏聞^ヲ申^シ下勅宣御教書^ヲ法然^ノ選擇^ノ印板取^ニ上大^ケ

講堂^ニ為^ニ報^{シカ}三世佛恩^ヲ令^ム燒^ハ失^ハ之^ヲ云々¹³

○三國傳記七の卷へ十四丁右鑑真和尚事の条に鑑真^{メシヒ}盲

タリトイヘドモ律三大部ヲバ手自^ヲ印板ヲ開キ

給ヘリ云々¹⁴

○義堂空華集¹⁵十九の卷へ廿五丁左東海寺海藏院重刊元

亨釋書化疏叙に大日本國平安城濟北沙門虎閑

鍊公撰元亨釋書者實本朝僧傳之權與也其書凡

三十卷始於傳智終乎序說上自雅古下至元亨一七五

百餘年間事若僧尼士庶之傳若寺宇佛像之志若

國家君臣資治之表有三一関乎吾釋氏一者靡不云事登載

而收錄焉至延文庚子六月有旨入藏領行蓋從其

徒圓通長老令在淬請也是書既鏤版行於世會永德

壬戌二月十六日恒失職本院遺火延及書庫凡歷

代三教之書秘帙輿編一夕而燼其版遂成烏有一矣

聞者咸惜茲者公之嗣上足前南禪大長老性誨禪

師靈見以其徒書請由東菴遷蒞院事未幾百廢俱舉

仍圖三重刊茲書費用不覺遂命在城等持禪寺住持

五臺某儼詞製疏巡叩十方諸檀那貴官長者緇白六才

男女若見聞者慨然樂施以濟板事其福可量也哉

疏曰維元亨釋氏之編定本朝僧史之筆也曰梁曰

唐曰宋三傳同塗若皎若寧十科異轍慨茲海

藏龍宮之失護俄驚琅函玉軸之歸空天道好還事行

看印板打就斯文復作正好點筆疾書增濟北之蔭

涼壯海東之福地天子萬歲宰臣千秋

按に此化疏元亨釋書刊本の卷尾にも載て至

徳元本甲子六月日疏とあり¹⁶

○廣隆寺来由記へ群書類從四百卅の卷載之永萬元年六月御願

文に古起經藏勢專置一切諸經焉奉書寫金泥」6ウ

本願藥師經一卷奉摺寫墨字同經一百卷云々

按に二條院永萬元年の事也此比の摺本本願

に剗刷ありて刊れるにや又は唐人を雇ひ或

は唐山の印板を得摺けんもはかりがたし

○西山上人縁起、四の巻に上人自院を建立セラル
ゝコトハ西山往生院ヲハジメトシテ歡喜心院
淨橋寺遣迎院等ノ四箇所ナリ云々又五部、大乘
經天台六十卷淨名涅槃、疏菩薩戒、義記顯戒論顯
揚大戒論等コト／＼ク印板ヲ開ケ未來ノ益ヲ
コゝロザス云々」7オ

按に類聚名物考書籍部、一に此文を引て云上
人は八千代高倉院御宇治承元年丁酉誕生宝
治元年丁未道寿七十一歳法臘五十八にて十
一月廿六日白河、遣迎院にて入滅也しかれば
此間に此經典の印刻は有しなるべし云々西
山縁起印本三種あり一は片假名本にて正保
五年の板也一は平仮名絵圖の本一は是湛が

報恩抄之上人は淨土西山派の祖菩薩の事に
て法然上人の門弟也後に異見を立て別派を
開けり」7ウ

○禪林類聚跋に貞治六年丁未解制日幹縁僧希果
重刊^{テス}京臨川寺^ニ云々

按に重刊とあればその已前の刊本ありし也

○大般若波羅蜜多經卷第五十三跋に奉^{オホシ}ニ為慶圓上^{タメニ}

上滅罪生善彫^{シテ}刻當卷^ヲ資^ク彼菩提^ニ矣貞應二年三月

二十九日佛子負榮云々

○大日經疏跋に為^レ讀^{シガ}ニ三宝慧命^ヲ於三會之出世^ニ廣施^ク

一善利益於一切之衆生^ニ是則守^チニ大師之遺誠^ム一儉令^レ

遂^ケニ小臣之心願^ニ謹以開^テ印板^ヲ一矣弘安二年己卯四月^日

從五位上行秋田^ノ城介藤原朝臣泰盛云々」8才

○法華經三大部跋に弘安第五之曆首夏上旬候鎮

守三世無尋之密議雖_レ處四曼不離之界_一會感_二六十

卷之印板_一染_二七十八之禿筆_一畢三部部法闍梨前僧

正承證云々¹⁷

○傳法正宗記跋に日本國相州靈山寺續_二先師宴海

未終願_一勸進沙門宝積沙弥寂慧等謹題今上皇帝

大皇太后宮祝_二延聖壽_一關東將軍家息災延命國泰民

安開_二鏤太藏印板副納内弘安十年丁亥九月日謹

題云々¹⁸

○觀無量壽經跋に本印奥記書校合倭漢数本勘定_一 8ウ

釋義意趣文字之有無次第之上下并點書闕行等

取捨是非若有難辯者就多本用之所以恐錯謬於

卒尔其功歷年月願愚迷於寸_一¹⁹心定以明友談因為

弘通證本勸重刊板印矣願以此功德平等施一切

同發菩提心往生安樂國建保二年〈太歲甲戌〉二月初八

日畢此部筆功大蒙師戒誨敬寫印字比丘明信²⁰○²¹奉

請根本²²〈即是圓行將來正本請出由緣記新寫奧〉於根本文不審由在復

無證本不能校合空積歲月無勘定期所以明信發

願致請機教相感當今正時披殘部文擬校合本及

類五會終準經旨勘定功列版印本於是同志兩⁹才

三三談一會加功成願證談所定記錄歷然順理應

文補欠夷剩或來論章成其文義或引韻篇匡字音

訓乃至字畫倭點假名次第讀談指定證印寬喜二

年四月三日酉終惣結首尾五日〈三月二十七日故首而三月小四月

二日不作此功故五日也〉倭漢之勘定先達古積其功魯魚の錯

謬未學今有何疑仍捧彼證本重開此版印者也抑

此印本者切聚阿書〈生讚刪序〉之字畫綴成三部〈大經阿彌觀經

陀經〉之文典〈但於大經者染禿筆寫之〉其慇懃之志趣不遑具記矣

仁治二年〈辛丑〉九月四日所終功也釋子仙才○貞永

之初壬辰之歲依彼遺約置此版刊殊期一周擬終」9ウ

功績乃至平等施一切矣二月三日立筆十月五日

寫竟釋子虞○去弘安年中行圓上人承勅願之旨

被開一切經之印板而正安第二之曆林鐘下旬之

天不終大功遂歸空寂今年依迎第三廻之忌辰知

真為謝彼恩德三部之妙典五部之要義抽懇棘開

印板是偏所備彼追責也雖弘一部於穢界之雲期

再會於淨刹之月而已願以此功德平等施一切同

發菩提心往生安樂國正安四年〈壬寅〉六月二十一日

沙門知真云々

按に此跋の趣にては建保二年に印刻し寛喜」10才

二年²³ 仁治二年正安四年など²⁴に重刻せるよし

なり

○弘法大師御請来目録跋に為_レ酬_二四恩廣徳三年寶₂₅

妙道_二写大師御筆_一謹開_二印板_一矣正安四年十一月廿日

高野山愚老沙門慶賢へ八十二_二云々

○虚堂新添跋に祖翁在世語録_二二帙刊_三流天下_一宋咸

淳五年晋_二之讀録後集_一已成_三三卷_一而本朝未_レ刊_二行之_一

先師常為_レ言而未_二果成_一也為_二人之法_一者易無_レ勇_レ為乎

仍搜_二遺送_一新添_二數紙於後録之尾_一鐔_二梓于龍翔_一正和

癸丑開炉日拙孫宗卓敬書云々」10ウ

○詩人玉屑跋に本書茲書一部批點句讀畢胸臆之

決錯謬多為焉後学之君子望正_レ之耳正中改元朧月

下澣洗心子玄惠誌云々

○圓悟錄跋に道證大師鏤佛果老人心要焉其用心

之勤見於後序但彼后序偏述南北參禪興坐禪之

異匪遑縷羅此書之蘊故云以至見機而作今察以²⁶

以至兩字正思欲贊許禪定等何故治生產業猶可

矧出入諸禪自在無礙哉盖曹溪斥坐禪所以顯其性

圓悟觀坐禪所以治其病所謂禹稷顏回同道者耶

旨嘉曆戊辰寒食之日比丘尼如淨謹跋云々」11才

○同錄別本跋に皆曆應四年十月日臨川寺刊行云

々

○臨濟錄跋に這箇冊子者當年臨際祖師巧作自拈

賊家具子也今五百年之後有兒孫比丘尼印開流

通而證之者且道是直躬者邪是不直躬者邪具眼

勝流垂鑒察焉嘉曆己巳仲秋日比丘尼道證謹識

云々

○首楞嚴義疏註經跋に師直熟思今生愆尤不可勝

計矧是曠却罪障何以消除因茲謹開此真詮之板

以秣積業之根所冀上報四恩下資三有同出妄想」 11ウ

昏域共入楞嚴覺場曆應二禩李春中漸武藏守高

師直敬誌云々

○雲臥記談跋に貞和へ丙戌三月吉日沙門明超捨財命

工鏤梓流通板留平岳自快庵中願一切衆臨生死

海乘般若舟速到彼岸云々

○雪峰外集跋に東山和尚自於疎山踏著木蛇遭其

一口既乃去死無幾痛定之後使解拈頭作尾拈尾

作頸正所謂雖是死蛇解弄也活由是叢林之士鮮

有不受其毒氣自為迷悶欲窺其班者數百年後流

於扶桑有契寔書記欲滋其毒於一切以殘涎剩^{マ、}」²⁷ 12才

化緑以鍔於梓其事未畢而輒角詢而後元圭首座

曰奈何有其頭而無其尾使人胡為而拈弄也耶於^是、
為其續之乃使梵僊為添足耳丁亥七月書于建

長方丈云々

○景德傳燈錄跋に貞和四年歲在戊子洛陽寄住正

琳命工刻梓捨置于普濟大聖禪師塔取建仁天潤

菴廣開法眼永祝堯年上報四恩下資三有法界有

情固圓種智者玉峯敬書云々

○黒谷上人語燈錄跋に元亨元年辛酉ノ歲偏ニ上

人恩徳ヲ報シ奉ランガ為又モロくノ衆生ヲ」 12ウ

往生ノ正路ニ趣カシメンガ為ニコノ和語ノ印

板ヲヒラク一向專修沙門南無阿弥陀佛圓智謹
疏沙門了惠感歎ニタヘズ随喜ノアマリ七十九
歳ノ老眼ヲノゴヒテ和語七卷ノ印本ヲ書_レ之元
亨元年辛酉七月八日終謹疏云々

按に黒谷法然上人語燈録は文永十二年正月
二十五日了惠か自序ありて世に倭語燈録と
称す七卷あり漢語燈録と_レもに寛永癸未孟
春刊行せりもとは元亨元年印板を開ける也

○論語集解跋に堺浦道祐居士重新命_レ工鏤_レ梓正年_レ 13才
甲辰正月吉日謹誌云々

按にはやく論語集解の印板ありけんを後村
上天皇の正平十九年堺人道裕が再板せし也

○五百家注柳文跋に祖在_二唐山福州境界_一福建行者

興化路莆田縣仁德里臺諫坊住人兪良甫久住_二曰
本京城阜近_レ畿年勞鹿至_レ今喜成矣歲次丁卯仲秋
印題云々²⁸

○傳法正宗記跋²⁹に福建道興化路莆田縣仁德里住人
兪良甫於_二日本嵯峨寫居憑_二自己財物_一置_レ板流行歲
次甲子孟夏四月日謹題云々_一 13ウ

按に柳文の奥書の京城阜近は嵯峨の事をい
へるにや勞鹿は勞力也鹿と力を通用せり丁
卯は嘉慶元年なるべし傳法正宗跋の甲子は
至徳元年にて弘安十年の板本とは別也兪良
甫は元末の乱をさけ嵯峨天龍寺清涼寺など
の僧徒にて来化しやがて嵯峨わたりにす
めりし唐人にや

○醫書大全の跋に吾邦以_二儒釋書_一鏤板者往々有焉

然未_三嘗及_二醫方_一患_レ民之澤人皆為_レ解_二近世醫書大全

自_二明_一來固醫家至宝也所_レ憾其本稍少散_レ見而未_レ」14才

見者多矣泉南阿佐井野宗瑞捨_レ財刊行彼明本有_二

三寫之謬_一令_下就_二諸家_一考_二本方_一以正_中斤雨_上雖_二毫髮私

不_二増損_一蓋宗瑞之志不_レ為_レ利而在_レ救_二濟天下人_一偉

哉陰德之報永及_二子孫_一矣大永八年戊子七月吉日

幼雲寿桂誌云々

按に大永八年は後奈良院の享祿元年也同帝

の天文二年阿佐井野また論語集解を刊行せ

り其に清原宣賢卿の跋あり

○吾妻鏡卅五の卷へ廿六丁左_レ寛元二年六月四日の条に

為_二前大納言家願_一奉_二為後鳥羽院御追善_一日来被_レ」14ウ

摺「寫法華經百部此形木即所被」彫「彼宸筆」也仍今

日被「遂」供養「云々

○同書四十一の卷「十一丁右」建長三年三月九日の条に

今日相承於御箋「被」供「養法華經形木鶴岡別當法

印為導師」是依年来御素願「乎自今巧令」修語「云々

按に六の卷「四十丁右」文治二年六月十五日の条大

宰府安樂寺永久六年正月十二日起請に毎月

觀音像一万體摺供養事をあるも觀音像の摺

本也

○建保二年東北院職人歌合「二番左」經師の歌に「15才

「ちびはてゝもじがたもなき摺形木こよひの月

にあらはかさばや

七十一番職人歌合「廿六番左」經師の哥に「わが戀はふ

りたる経のすりかた木たえ間がちにもなりに
けるかな

按に此歌どもには摺形木とよめり伊豆国修
禪寺に弘法大師の六字の摺形木二枚ありい
つの比彫たりけん其体鎌倉將軍の代より下
ける物とは見えず³⁰

○地藏靈驗記九の卷へ十四丁右へ印佛功力免_レ害事の条に」 15ウ

香箱ノ中ヨリチヒサキ地藏ノ印板ヲトリイタ
シテ香水ニ印シテゾ授ケ玉ヒケル云々

○同書十二の卷へ十八丁右へ印佛利益事の条に御長一寸^{タケ}

バカリニ地藏ノ模^{カタギ}ヲ求^{モトメ}テ虚空^{コクウ}ニ向テ印シアリ

キケル錦ノ袋ヲ此印^シヲ入^イテ直垂ノクビカミニ

ゾ結付タルアル時尼公見玉ヒテ其方ノ頸^{クビ}ニカ

ケタルハ何条見苦キ田舎^{ナカナラヒ}習カトゾ呵^カシ申サル
伊尹願所ノ問^{トヒ}カナト喜ビサレバ其幼少ノトキ
ヨリ地藏ヲ信ジ奉リ今ニイタルマデ片時モ身
ヲ放シ奉ラズ奉公ノナラヒニテ急ノ出仕ナド」
16才
ニモ忘レマキラセンコトヲアサマシク思^{ヲモヒ}テ地
蔵ノ印板ヲ錦ニ包^{ツミ}奉リタル由開^{ヒラ}キマキラセテ
ゾ見セケル尼公コレヲ手ニ取テ頂^{イタマ}キヲ尼^{アマ}コソ
多年ノ行者ナレドモ女心ノアサマシサハ是程ノ
故實ハナカリケリ尤^{モトモトシヨリ}年寄ナドノ俄^{ヒキイ}ニ引入ラン
ニモ地藏ヲ身ニ持奉ル方便^{テダテ}コレニシクアシイ
シクモ巧^{タクミ}玉ヘリ尼モ学^{マナビ}奉ントテ小^{チヒサ}キ印板ヲ迎^{ムカ}
ヘ上絹^{ウハキヌ}ノ上ニゾムスビツケタル云々印佛ノ功
徳ヲ以テ自餘ノ益シルノ上^{ウヘ}ニゾムスビツケタ

ル云々印佛ノ功德ヲ以テ自餘ノ益シルベシ云」 16ウ

々

按に地藏の像の板木をいへり此文にかた木

とも印板とも印佛とも書たり

○類聚名義抄三の卷手部に摸カタギ云々同木部

に模カタギ云々同言部に謨カタギ云々

○字鏡集五の卷木部に摸カタギ云々

○倭玉篇中卷手部に摸カタギ云々

按にカタギをカタムに作れる本もあれど誤

也

○難字記三の卷手部に模カタギ云々」 17オ

○類字名物考³¹書籍部一に印版の事唐にては李唐

の代より見えたり皇朝にてはその始詳ならず土

御門院の元久の比かとよ法然上人の選擇集を
板に印せるよし山門の申牒に見えたり又足利
の学校にて摺れる書今もあり是をは俗に足利
版といへり又夢窓国師多く佛書詩集を印板す
ともいへり又高武藏守師直が板せし佛書もあ
りその書には跋文有り又比外々折々の禅刹に
てきざめる禅録詩集等も有もの也されど是も
おほくは活版と見えたり今の世にすべて印板
のさかりに行はれし其初は慶長の初に中野道
伴といへるもの多く作れりといへり今も古き
ものには此奥書ある書まゝ見えたり云々

按に類聚名物考三百十卷山岡俊明^{マッアテ}出家して

明阿といへるが作也文葉逸著聞集などは同人

17ウ

作也

○大和事始四の卷文教門に日本にて書籍を板に

刻^{キザ}む事其始をしらず元久三年山門申状に法然

坊所^レ造選擇集者謗法書也天下不^レ可^レ止^ニ置之在々

所々所^レ持^{モツ}并其印板大講堂取上為報^ニ三世佛恩^ニ可^ニ 18才

焼失之由奏聞仕候畢とあり是を以て見れば此

時已に選擇集を板行せし也しかれば書籍を板

行する事猶其前久しき世よりありけるならん

又夢窓国師の弟子妙葩^{メウハハ}相國寺の祖也夢窓多く

佛書詩集等を板に刻めり多くは妙葩が跋あり

又高師直が板行せし佛書あり其後兵火にかゝ

りて彼板も尽く焼亡ぶ其故に不^レ傳といへり師

直が板行せしは師直か跋あり又美濃の瑞龍寺

にも板あり此寺は関山クワンザンが寺にして関山板を開

し也周防の山口にもむかしより板あり長門の「18ウ

香積寺に三重韻の板あり亦角スミノクラ倉与一市ウツマサ太秦の僧

に史記及謡の本を開版せしむ嵯峨本と云是也

杜子美千家注を足利本といへどもさにはあら

ずむかし朝鮮に便よき時我國の紙を遺して板

をすらしめたとぞ程敏改か心経附注などは

朝鮮より其板わたりし也近世の板印は慶長の

末に庭訓節用集など少々有しか寛永六年の比

多く来て今は其数をしらず云々

按に慶長の末に庭訓節用集有しか寛永六年「19才

の比より多くなれりとかやとあれどその已

前盛になりし事は上に引る書ともにて知べ

し又節用集は文亀板あり楷字の半截本也

俗に饅頭屋本といふ又行書の半截本あり時

代不_レ可_レ考慶長二年浅川易林庵素心か校本あ

り上下二卷とす此三本いづれも慶長以前の

板なり

○宋人高承か事物紀原四の卷へ経籍藝文部へに印板筆談

曰板_一印書籍_一唐人尚未_二盛為_一之自_三馮道始印_二五經_一之

後典籍皆為_二板本_一即唐始為_二板印_一矣五代會要曰後_一19ウ

唐長興三年二月中書門下奏請依_二石經文字_一刻_二九

經印板_一也云々

○同書七の卷へ真壇浄社部へに印経院又曰太平興國八年

置_二院経院_一神宗熙寧未_二廢其院_一以_三所_レ印板_二賜_二顯聖寺_一

云々

○明人李贄か疑耀一の卷に上古書籍皆編_レ竹為_レ筒

以_レ葦貫_レ之用漆作_レ書簡泰詒³²重不_レ便_二提挈_一自有_下製_二紙

筆及墨_一者_上乃易_二去竹簡_一誠為_二使易_一便易_一然寫本亦未_レ有_二刻板印行_一也後唐明宗長興二年宰相馮道李愚請令

刊_二國子監_一田敏校_二正九經_一又母昭喬貧時嘗借_二文選_一20才

於交遊_一其人有_二難色_一昭喬發憤曰異日若貴當_下版鏤

之_一以遺_中學者_上後仕_二孟蜀_一為_二宰相_一遂踐_二其言_一又以_レ石鏤_二

九經於成都_一是印_二行書籍_一始_レ之者後唐繼_二之者孟蜀

也云々

○明人胡應麟が筆叢經籍會通四に葉少蘊云世言

雕板始_レ自_二馮道_一此不_レ然但監本始_ル馮道_一耳柳玘訓序

言其在_レ蜀時嘗閱_二書肆所_レ鬻字書小学_一率雕本則唐

固有_レ之陸子淵豫章漫抄引_二揮塵錄云母昭喬貧詩

嘗借_二文選_一不_レ得發_レ憤云異日若貴當_下板_二鏤_一之_一以遺_中學
者後至_二宰相_一遂踐_二其言_一子淵以為興_二馮道_一不_レ知_二孰先_一 200
要_レ之皆出_二柳玘_一後也載閱_二陸深河汾燕間錄_一云隋文
帝開皇十三年十一月八日勅廢_二像遺經_一悉令_レ雕_レ板
此印書之始據_二斯說_一則印書實自_二隋朝_一始又在_二柳玘_一
先_二不特先_二馮道母昭喬_一也第尚有_二可_レ疑者_一隋世既有_二
雕本_一矣唐文皇胡不_下擴_二其遺制_一廣刻_中諸書_上後盡選_二五
品異常子弟_一入_二弘文館_一鈔書何耶金意隋世所_レ雕特
浮屠經像益六朝崇_二奉釋教_一致_二然未_一及_二槩雕_一他籍_一也
唐至_二中葉以後_一始漸以_二其法_一雕刻諸書_一至_二五代_一而行
至_レ宋而盛於_レ今而極矣云々

○³³ 明人方以智が通雅卅一の卷器用書札の条へ「十丁左」 21才
に雕本印書也隋唐有_二其法_一至_二五代_一而行至_レ宋而▲

(▲盛今則極矣葉夢得言柳批詞序在「蜀」見³⁴)

字書雕本「不」始「自」馮道「監本始」道耳揮塵錄言母昭

喬有「版鏤之言」陸深河汾燕間錄云隋開皇十三年

勅廢「像遺經」悉令「雕」版則此又在「柳先」疑者以隋有「

此法」唐何不「行或止奉」崇釋教邪沈存中曰慶曆中

有「畢昇」為「活版」以「膠泥」成今則用「木刻」之用「銅版」

合「之

○又へ十一丁右「云麻沙印本之初出未」精者也老学菴筆記

曰尹少稷曰能誦「麻沙版本書一寸」又云三舍法行

教官出「易義」云乾為「金坤又為」金諸生曰恐麻沙本」 21ウ

也今精本用「墨汁」或上烟薰印乃黑

○清人趙³⁵が「咳餘叢考卅三」の卷刻書々冊の条に

池北偶談引五代會要後唐長興三年命太子賓客

馬縞等充詳勘九經官於諸選人中召能書者写付匠雕刻每日五紙与減一選漢乾祐中周禮儀禮云羊穀梁四經始鏤版周廣順三年尚書在丞田敏進印版九經馬端臨文獻通考書籍門亦載刻書始於後唐沈括筆談及孔氏雜說亦皆以為始于馮道奏鏤五經又和凝有集百餘卷自鏤版行世廣順中蜀人母昭喬出私財百萬刻九經板又刻文選初學記

22才

白孔六帖行于世是刻書始於五代明矣然葉夢得又謂唐柳玘訓序言在蜀見字書雕本而元徵之序白樂天長慶集亦云繕寫摹勒銜賣于市井摹勒即刊刻也則唐時已開其端欵筆談亦謂板印書籍唐時尚未盛³⁶則已有之也河汾燕間錄又謂隋開皇十三年十二月八日勅廢像遺經悉令雕撰王阮亭引

之以為刊書之始刊書與抄書難易不啻百倍若隋
已有雕刻何以唐時尚未盛行直至五代時始有之
當是隨唐時習其技者少刻書甚艱故耳胡應麟筆
叢亦謂雕本肇于隋行于唐擴于五代精于宋郎瑛「
七修類稿又謂唐時不過少有一二至五代始盛宋
則羣集皆刻要不謬也云々

按に漢土の書雕板の事の所見枚挙に遑なけ
れば僅にひとつふたつを引出なり

○與清曰刻書隋文帝の開皇年間にはじまり本朝
には孝謙天皇の寶龜年間に傳はれりといふべ
しされど漢土の太古封禪の刻石及鼎銘盤銘等
ありこゝにも雄略天皇の朝の小子部栖輕が碑
文柱上宮太子の伊豫湯岡碑などきこえて已に

刻石雕木の工あらんには剗削のわざなしとい」 23才

ふべからずかゝれば何世に起れりといふ事知

べからねど隋の開皇本朝の寶龜を此彼ものに

見へたる始とすべし三國傳記に鑑真^{メシヒ}盲て後手

自印板を開けりといへるはうけがたき説也³⁷余

がまのあたり見聞せるは目黒の長泉律院の藏

本に太子の勝鬘經注の刊本あり倭葉^{ヤマトハヂ}にて其古

鉢鎌倉以後の物とは見えず余が家藏に文明十

三年版の寂光釘抜念仏の画詞永祿元年版の年

代記などありその外古版本の世に傳はれるも

の擧^{アゲ}ていふに違なし」 23ウ

第二加和良鍔具足^{カフラヨロヒグソク}

○崇神記へ八丁才^ヨ十年に時人号^ヨ其脱^レ 甲處^一曰^二伽和羅^{カワラ}云^一

々

○古事記應神の段に故到詞和羅之前^一西沈入故以^レ

鈎探^二其沈處^一者^{カキヲ} 繫^{カハリテ} 其衣^{コロモノウヂナルカワラニ} 中^二 甲^一 而詞和羅鳴故號^二其地^一

謂^二詞和羅前^一也云々

按に甲は上古詞和羅といひてそは物に觸^{フル}る

音^{オト}の訶和羅と鳴に據たる名也さるを東雅へ十の

卷へ古事記傳へ卅三の卷六十六丁へなどに亀の甲を俗言に

亀のカハラといへば甲の古言がカワラにて」24才

訶^カ和^ワ羅^{ラナリ}鳴^{ナリ}たるは別義ならんといへるは深く

ま^サと^トら^{ニヤ}ざりし³⁹也訶和羅は今俗にガラリト鳴

ルといふにおなし瓦をカハラといふもハと

ワは走をハシルともワシルともいへるごとく

常に通^{カヨフコエ}音なれば瓦のガラ〜と音するによ

れるなるべし亀カメの甲カワラまた⁴⁰さる心にや訶カワラノ和羅

サキ前の在処は山城國綴善郡にて今河原村とい

ふ崇神記の伽和羅も同処にて故事の傳の異

なる也と古事記傳へ卅三の卷六十五丁にいへり和名抄

に山城國綴喜郡の甲作の郷あり作は羅の誤」24ウ

写にて甲羅なるべし然て伊勢菴藝郡加和良

神社丹波氷上郡加和良神社筑後三井郡高良

玉垂命神社出雲風土記の意宇郡加和羅社な

とみな甲を祭れる社にて杵衝神社劍主神社

劍神社高杵神社楯縫神社胡祿神社由貴神社

弓削神社兵主神社貫前神社など武器によれ

る神社おほかればそれにおなじ地名にも追

江犬上郡甲良郷あり雄略記へ十丁ウ武烈記へ五丁

ウゝに各羅嶋ありこれも同義にや

○景行記〈廿丁オ〉に卷^{マキ}甲戟^{ヨロヒ}戈云々允恭記〈六丁オ〉に甲^{ヨロヒヲ}服^{キテ}ニ 25オ

襖^{コロモノウチニ}中一云々又分明^{ミタ}瞻^{ヨロヒ}衣中有^リ鎧云々雄略記〈一丁ウ〉に

被^キ甲^{ヨロヒヲ}帶^ヲ刀云々又〈廿六丁ウ〉其所^{ハナ}發^{ツヤハトホル}箭^{フタヘヨロヒヲ}穿^ニ二重^甲一云々射^イニ

穿^{トホシツオホヲノデガタチフタヘヨロヒヲ}大斧手楯二重^甲一云々欽明記〈廿一丁オ〉に帶^ニ刀^レ感^{キテ}擲^レ甲^{ヨロヒヲ}

云々又〈廿九丁ウ〉著^{アカフヘノヨロヒ}頸^{モノヒトウマ}鎧^ニ者^一騎^ニ云々敏達記〈八丁ウ〉に被^レ

甲^レ乘^レ馬云々皇極記〈十九丁オ〉に擲^キ甲^{ヨロヒヲ}持^レ兵云々齊明記

〈五丁ウ〉に鎧^{ヨロヒ}二領云々天武記〈二丁ウ〉に甲^{ヨロヒカフ}冑弓矢云々

持統記〈廿七丁オ〉に人甲一領云々

○古事記應神の段に衣^{コロモノウチニキセテ}中^{ヨロヒ}服^レ鎧云々又其衣^{ソノウチナルヨロヒ}中^{ヨロヒ}甲云

々

按に日本紀古事記の所見いづれも後の訓に」 25ウ

てヨロヒといふべき据なし此外令續日本紀

などにも出されといづれも必ヨロヒと訓べくもあらねばカワラと訓ヨマんかた然シカるべし

○和名抄征戦具部に廣韻云鎧苦蓋反甲也釈名云

甲者似ニ物之鱗甲一也和名与路比ヨロヒ云々説文云胄音宙首鎧也和名加布度カブト云々

○新撰字鏡日部に胄治右反去也後也緒也胤也連也續也与呂比ヨロヒ云々

按に与呂比ヨロヒといふ詞は物の具足せるにいへ

り万葉一へ七丁ウへに聚トリ与呂布ヨロフ天乃香具山アマノカグヤマ云々此」26才
は山形の足備りて缺たる所なきにいへり齊

明記へ五丁ウへに弓矢二具ヨロヒ云々比は具したるにい

へり孝徳記へ十七丁ウへに無ナカレ施オクサ三珠襦玉押一云々此押

は具装にて装具したるにいふ字義は漢書董

賢傳に見えたり物具をよろふといふ詞合戦
書に見え厨子ズシヒト一よろひ某一よろひなど物語
書におほかりされば甲冑を著具たる貌より
体語ふいひなせし也既に字鏡和名抄などに
鎧の名あれば延喜式三代実録などの甲鎧の
字をはヨロヒと訓べくや具足小具足なとい」26ウ
ふは保元平治より後の詞なるべし

○與清曰甲古代は必加和羅といひ是を神軀に祭
れる杜を加和良神社ともいへり今京より後ヨ
ロヒといふ名出来て古名の加和羅は人しらぬ
やうになれりし也保元平治の比より後には具
足小具足など字音にさへいふことはなりぬさて
加和良は觸フルれは然鳴シカナル音よりいひヨロヒは具ヨロヒヨソホフ装

よりいひ具足はヨロヒを字音にいひたる也

第三船靈

○神代記⁴¹「六丁オ」に遂為^ニ夫婦^一生^ニ蛭児^{ヒルコ}「便載^ニ葦船^{アサネ}而流^{ハナチ}之」27オ

云々又「九丁オ」次生^ニ蛭児^一雖已三歳「脚猶不^レ立故載^ニ之

於天磐矩櫛樟船^{アメノイハククス}而順^{マニ}風放^{ハナチスツ}棄云々

○古事記上卷に次生神名鳥之石楠船神亦名謂^{アメノ}天

鳥船^{トリフネ}云々

按に天磐矩船^{アメノイハククスフネ}は伊弉冉尊の御生子にて一名

は鳥之石楠船神とも天鳥船^{アメノトリフネ}ともいへる也天

は天神なれば称す鳥は船の疾行を鳥の飛^{トクユク}に

たとへしにや鴨ちふ船などよめるは水に浮^{ウキ}

たる貞^{サマ}よりいふめればさる心ともすべし神

代紀下「四丁ウ」に以^ニ熊野諸手船^{クマスノモロタブネ}「舟名天鳩船^{アメノハト}載^{イセ}使者稻^{ツカヒイナ}」27ウ

背脛^{セバキヲ}一遺^{ヤリテ}レ之云々又へ十三丁オ^{タカハンウキハシアメノトリフネヲモツク}に高橋浮橋天鳥船亦將^{ツク}二

供造^{ラン}二云々など鳥にたとふる常也亦鳥船^{トリフネ}

を建御雷神^{タテミカヅチノソヘ}に副て下し給ふとある天鳥船は

船鳥^{フナドリ}を上下に誤れるにて天夷鳥命の事なる

べしと古事記傳へ十四の七丁オ^ミにいへるはさるこ

と々きこゆさて天石楠船神鳥石楠船神天鳥

船神共に一体にてこれ船靈神といふべし

○神功紀へ五丁オ^ミに既而神有^{ヲシヘゴト}誨^{マキシタマハシタカヒテ}日和魂^ニ服^{ミイ}二玉身而守^{ミイ}壽

命^{イノチヲ}一荒魂^{アラミタマシテ}為^{サキト}二先鋒^{イノサノフネ}一導師^{サキト}船^{フナ}云々亦へ五丁ウ^{ヲキテ}擣^{ミツメ}二荒^{ミフネノシツメ}一為^{サキ}二軍先

鋒^ト一請^{ネキテ}二和魂^{ミフネノシツメ}一為^{ミフネノシツメ}二王船^{ミフネノシツメ}鎮^{ミフネノシツメ}一云々^{ミフネノシツメ}28才

○古事記仲哀の段に我之御魂^{アガミタマヲマヒテ}坐^{ウヘニ}二船^{マキノハヒヲイレ}上^レ一而真木灰納^レ

瓠^{ヒサコニ}亦箸^{ハシト}及比羅傳^{ヒラデヲサハニツクリテミナク}多^{ウケテ}作^{ワタリマス}皆々散^{コトシロヌシノ}二浮^{ウケテ}大海^{ワタリマス}一以可^レ度^{ワタリマス}云々

按に日本紀の神は天照太神稚日女尊事代主

神表筒男中筒男底筒雄三神と合せて六神之古

事記の神は天照太神底筒男中筒男上筒男合

て四神也其傳説おなじからずさて我荒魂和

魂を祭れとのたまへるは上筒男中筒男底筒

男の三神にて住吉鎮座の大神也天照太神を

舟霊と祭るよしは舟長日記上巻に紙鬘を以

て大神宮の神勅を伺て事を計る也此紙鬘と」 28ウ

いふは一外升を米八合程いれ紙を一寸四方

に切て思事を書付丸めて其上に置扱大神宮

を念じて一万度の御祓を其上にかざせば丸

めたる紙の中一ツ飛あがりて御祓へ付也そ

れを見て知事也此神告はいさゝか違事なし

されは日本の船頭は大神宮の神託のみにて

船を乗り侍事也云々とあるも天照大神の船

を守り給ふあかし也

○延喜祝詞式に遣唐使時奉幣云々 スベミマノミコトノミ 皇御孫尊乃御

コトモチテスミノエニタヘゴトヲヘタテマツルスペカミタチノマヘニマヲシタマハク 命以_ニ氏住吉尔稱辞竟奉留皇神等乃前尔申賜久」29才

モロコシニツカヒツカハサントスルニヨリ 大唐尔使遣左牟止為尔依二船居無一_ニ氏播磨國与利_ヲ船乘

シテツカヒハツカハサントオモホシヌ 為_ニ氏使者遣左牟止所念行間尔皇神命以_ニ氏船居渡

ワガツクラムトヲシヘサトシタマヒキヲシヘサトシタマヒナ 吾作牟止教悟給_ニ教悟給比那我良船居作給_ニ部礼波

ヨロコビウレシミキヤジリノミテグラヲ 悦已備喜志美禮代乃幣帛乎官位姓名尔令_ニ捧_ニ贊_ニ進_ニ

マツラクトマウス 進奉久止申

按に遣唐使の船の事を住吉神に禱玉ふ也船_{フナ}

ズエフナデ 居は船出する湊をいふ_{トコロ}

○延喜臨時祭式へ廿二丁才_{フナズエ}に開_ニ遣船居_ニ祭_ニ住吉社_ニ幣料

絹四丈五色薄絶_{キヌ}各四尺絲四絢綿四屯木綿八両

一斤四兩古神祇官差^レ使向^レ社祭^レ之云々^ヲ」29ウ

○万葉集十九の卷へ卅六丁才へ天平五年贈^ニ入唐使^一歌に墨^{スミ}

吉^エ乃^ノ我^ワ大^ガ御^ミ神^{カミ}船^{フネ}乃^ノ倍^ヘ尔^ニ宇^ウ之^シ波^キ伎^イ座^{マシ}船^{フナ}騰^ト毛^モ尔^ニ御^ミ

立^タ座^{ハシ}而^{シテ}佐^サ之^シ与^ヨ良^{ラム}牟^ム磯^{イソ}乃^ノ崎^{サキ}々^ク許^{コギ}藝^ハ波^テ底^ム牟^ト泊^{マリ}々^ク尔^ニ

荒^{アラ}風^キ浪^カ尔^ゼ安^ナ波^ハ世^セ受^ス平^{タイ}久^ラ率^ケ而^キ可^テ敝^カ理^ヘ麻^リ世^セ毛^モ等^ト能^ノ

國家^{クニヘニ}尔^ニ云々

○同廿の卷へ卅七丁ウへ海^ウ原^{ハラ}乃^ノ可^カ之^シ古^コ伎^キ美^ミ知^チ乎^ヲ之^シ麻^マ豆^ヅ多^タ

比^ヒ伊^イ已^コ藝^ギ和^ワ多^タ利^リ弓^テ安^ア里^リ米^メ具^グ利^リ和^ワ我^ガ久^ク流^ル麻^マ握^デ尔^ニ

多^タ比^ヒ良^ラ氣^ケ久^ク於^オ夜^ヤ伊^ハ麻^イ佐^サ称^ト都^ツ々^ク美^ミ奈^ナ久^ク都^ツ麻^マ波^ハ

麻^マ多^タ世^セ等^ト須^ス美^ミ乃^ノ延^エ能^ノ安^ア我^ガ須^ス賣^メ可^カ未^ミ尔^ニ奴^ヌ佐^サ麻^マ都^ツ

利^リ伊^イ能^ノ里^リ麻^マ宇^ウ弓^テ奈^ナ尔^ニ波^ハ都^ツ尔^ニ船^{フネ}乎^ヲ宇^ウ氣^ケ須^ス惠^エ云々^ヲ」30才

々

按に住吉大神の船を守り玉ふ事古事記仲哀

の条日本紀神功紀延喜臨時祭式祝詞式万葉

集十九の卷廿の卷などを考て知べし住吉の

神は延喜臨時祭式へ十丁ウに住吉神四座云々神

名式上へ廿三丁ウに撰津國住吉郡住吉坐神社四座

並名神大月次相嘗新嘗云々廿二社註式に日

本書紀云伊弉諾尊所生其へ第一底筒男命へ第二

中筒男命へ第三表筒男命是即住吉大明神此三

神へ並第四神功皇后鎮座へ以上四所也社家説云住吉社」30ウ

四座第一天照大神第二字佐明神第三へ底筒男中筒男

表筒男為一座第四神功皇后也住吉四所明神は表筒

男中筒男底筒男の三柱は古今動ことなし式は

神功を加へ或は天照大神を加へなとして一

所の説は確^{タシ}乎^カならず

○皇大神宮儀式帳に御船神社一處ミフネノ〈有ウ余ニノ郷土羽村在サトノトハ〉稱マウス二大オホム

神乃御蔭川神カミノミカケカハノカミトミカタナシヒメミコ一形無倭姫内親王代定祝正殿一字イハヒマツルシヨウデン

〈長七尺弘五尺高八尺〉玉垣一重タマカキヒトヘ〈四方各二丈〉坐地オハシマストコロフタマナシマ二町四至マ〈東南公田

西百姓家北御力代田〉

○延喜太神宮式に太神宮所撰二十四座云々御船」31才

社云々⁴²

○倭姫世記に廿五年云々倭姫命ヤマトヒメノミコトハ波皇大神イタハキ奉ヲ載レ

天小船乘給御船ノリ仁クサノノ雜イムタテホコ神財並忌楯梓等ヲトメメオキ留置天

從イデマシキ小河一幸行サムカワトナツケ玉ヒキ云々從二其處イデマシ一幸ツクシ玉ヒキ行河一盡支其河之水

寒河止号サムカワトナツケ玉ヒキ其處御船留給ミフネハテタマヒテ即其處仁御船神社定サタメ

給タマヒキ支云々又廿六年云々于時美船神朝熊水神等アサクマノミナトノタチ

御船仁乘奉ノセ五十鈴之河上仁遷幸云々ス、ノミユキン玉フ

○神名秘書に御船社太神乃御船神也在二有ニ余郷止

羽村_二云々

按に御船神社の事類聚神祇本源元々集廿_二 31ウ
杜注式論神記など物に見えたる挙尽しがた

し此は太神宮の乗御の御船の神也

○續日本紀廿四へ廿二丁ウへ天平宝字七年八月壬午の条
に初遣_二高麗國_一船名曰_二能登_一帰朝之日風波暴急漂_二
蕩海中_一祈曰幸頼_二船靈_一平安到_レ國必請_二朝廷_一酬以_二錦
冠_一至_レ是縁_二於宿禰_一授_二從五位下_一其冠製錦表絶裏以_二
紫組_一為_レ纓云々

按にはこれは能登船の靈に祈玉て利益を承り

從五位下を授し也船に位を授ること續日本後

紀六の卷承和四年五月丁酉授_二遣唐第一船其_一 32才

号太平良從五位下_一と有

○延喜神名式に伊豆國田方郡輕野神社云々又近

江國愛智郡輕野神社云々

按に輕野は船の名にて古事記仁徳の段に河

内國^{ツキ}兔寸河の西の大樹を伐て作れるよし日

本紀には應神記五年十月伊豆國に命て作れ

る船輕行如^レ馳故輕野といふよし見ゆ國卅一

年八月の条にも官船枯野者伊豆國頭^レ貢とあ

り田方郡輕野神社は比船靈を祭れる也近江

國愛智郡の輕野神社もよしあるべし豊臣太[」] 32ウ

閣の御座船河竹丸も伊豆國宇佐美の里の八

幡宮の神木にて其切取たる木口より枝を生じ

たるが十二本あり大なるは廻り六尺余もあ

るべし小なるも三四尺に下らず伐口は疊十

二疊敷^{シク}べきひろき也遠方より見れは一株の

木小山の如し比河竹丸の靈も神に祭りて今

江戸本所に河竹大明神あり船長日記上卷へ池田

憲親が聞書也へに船玉^{サル}の去⁴³をすべて船玉とは船のぬ

し也帆柱を立る筒の下に納置事也紙雛一附

其船主の妻の髪毛少し双六の簾二へサイノ目ノ置方ア」 33才

リへ此三品を納置を船玉といふ也難船ある時

は必此船玉^{サル}去也難船したる船を見るに必船

玉はなきもの也とぞ難船すべき以前に何ぞ

に化して近去事も有こと見ゆかにかくに船靈

なしといふべからず

○諸神記中卷七種番神の条に東方八神云々第八

箕宿神此曰^ニ浮船神^一云々

按に神社鎮座歳代考にもかくいへり浮船神

は船神なるべし元亨釋書には華嚴經の守夜

神を船神とし叡山には新羅大明神傳教大師」33ウ

の船を守玉へるよいいへり廿三社注式の異

本には豊玉姫を船神とし神社啓蒙六の卷へ廿九

丁ウへには船玉神卜部説曰「猿田彦」と見ゆいづ

れも各々私意をもていひ出たるものにてう

けひくべくもあらざりけり

○延喜神名式上に撰津國住吉郡船玉神社云々

按に撰陽群談十一の卷へ十四丁ウへに住吉撰社とす

所「祭船玉命也」云々撰津志二の卷へ五丁オへに住吉

郡船玉神社在北花田宮邑「与船堂村」共預「祭祀」

云々倭漢三才図會七十四の卷撰津國住吉郡」34オ

住吉大明神撰社に船玉在_二本社之前坤隅_一云

々

○類聚国史十の卷へ神祇部下へ常祀に桓武天皇延暦十八

年五月丙辰前遣渤海使外從五位下内藏宿祢賀

茂麻呂等言_ヲ歸郷之日海中夜暗東西掣曳不_レ識_レ所

于_レ時遠有_二火光_一尋_二逐其光_一忽到_二鳴濱_一訪_レ之是隱岐國

智夫郡其處無_レ有_二人居_一或云比奈麻治比賣神常有_二

靈驗_一商賣之輩漂_二宿海中_一必揭_二火光_一賴_レ之得_レ全者不

レ可_二勝數_一神之祐助良可_二嘉報_一伏望奉預_二奉幣例_一許_レ之云

々_一34ウ

按に百九十三の卷殊俗部渤海上にも比事を

記せり神名帳に隱岐國知夫郡_{チブリノヒナマデヒメノ}比奈麻治比賣

命神社云々續日本後紀へ七の卷十二丁ウへ承和五年

冬十月甲午奉^レ授^ニ隱岐國无位比奈麻治比賣神

從五位下云々三代實錄へ廿の卷六丁ウへに貞觀十三年

八月廿九日授隱岐國從五位上比奈麻治比賣

神正五位下云々同書へ卅三の卷廿丁オへに元慶二年五

月十七日奉^レ授^ニ隱岐國正五位下比奈麻治比賣

命神正五位上云々と漢三才図會へ七十八の卷へ隱岐

部に離火權^{タクヒ}現在^ニ海部郡島前一祭神比奈麻治比^{タクヒ}」35才

賣神又名^ニ大^{オホヒルメノムチト}日^ヒ雲貴^{クモキ}云々一日此乃天照皇太神

之垂跡同一而於^レ今海舶多免^ニ漂災^{ヒラヤ}者因^ニ神火光^{ミカヒ}

取不^レ可疑云々諸国里人談三の卷に焚火隱岐^{タクヒ}

國の海中に夜火海上に顯ず是^{タクヒ}焼火權現の神

靈也比神は風波を謚^{シツメ}給ふ也いつれの國まで

も難風にあひたる舩夜中方角をわかたざる

に比神に立願し神号を唱れは河上に神火現

じて難を遁るゝこと疑なし云々

○土左日記に廿六日云々こぎくる道にたむけす

る所ありかちとりして幣^{ヌサ}たいまつらするにぬ」 35ウ

さのひんがしへちれは舵取のも⁴⁴うしたいまつ

ることは比ぬさのちるかたにみふねすみやかに

こがしめたまへと申て^{タイムツ}奉るこれをきゝてある

わらはのよめるゝわたつみのちぶりの神にたむ

けするぬさの追風やまずふかなん貫之家集へ八の

離⁴⁵別部へにあひしれる人の物へゆくにぬさやると

てよめるゝ行けふもかへらむ時も玉ほこのちぶ

りの神をいのれとぞ思ふ袖中抄へ十九の巻へに顕昭云

ちぶりの神とは道^{ミチ}ふりの神といふにや海路に

もよめり云々隠岐國にこそ知夫利崎といふ所」 36才

にわたすの宮という神はおはすなれ舟出すと

ていその神に奉幣してわたりを祈とそ⁴⁶申す

それを本軀にて海をもくがをも道を祈る神を

ばちぶりの神と名づけたるにや又その神を思

ひてかの所にもつけたるにや是はあまりの事

也云々

按に幣^{ヌサ}は陸路の手向の神に手向るのみにも

あらず海路にても幣奉ること万葉によめる

哥これかれ⁴⁷見ゆ隠岐ちぶりの神は神名帳に

知夫郡由良比女神社元名和多須神續日本後」 36ウ

記七へ十二丁ウへに承和五年冬十月甲午授^二從五位下^一

と見え和多須神といへるも河海を渡すよし

なるべし神体は一宮記に須勢利媛命とす

○類聚名物考神祇部六に或書に正月元日船に松

鋸して其神を祭^ル船魂祭といふ船神は本朝に

ては猿田彦命にて問船玉命と申とかや歌に幸

玉とよみて手向の神といふも是也唐にては嶋

耳神孟公孟説なとみな船神也又琉球にては天

妃菩薩を船魂也といふ常陸國水戸の中湊と云

所に比神を祭しつめ玉へり天妃山大権現と申」 37才

也云々

按に天妃の事顧炎部が郡國利病書四十の卷

河全國に清江浦天妃惧靈濟宮云々同書四十

五論「儀真東関」之条ニ昔虞文靖公送祠天妃二

使者謂國家之東往葦之澤濱海而南者廣褒相

乘淤沮可稻之何啻數千百里云々同四十七江蘓

揚州府水利条ニ姜家堰在塩城之西北舊有海

口自岡門鎮十八里至登瀛稿天妃廟下新洋港

入于海云々西湖志十五の卷祠宇ノ条へ四十四丁順

濟聖妃廟へ在三第觀測俗名天妃廟錢塘縣志即三仙閣址祀」37ウ

莆田林檢女靈衝夫人宋宣和中賜額曰順濟

故仍其曰順濟聖妃廟云々陔餘叢考卅五の卷

に江漢間捺」舟者率奉」天妃」而海上尤甚張變東

西洋考云天妃莆之渭州嶼人五代晴閩都巡檢

林願之第六女生」普天福八年宋雍熙四年二月

二十九日化去後嘗衣朱衣往來海上里人虔祀

之宣和癸卯給事中路允廸使高麗中流遇風他

舟皆溺神獨集路舟得」免還奏特賜廟號曰順濟

紹興乙卯海寇至神駕風一掃而遁封昭應崇福
乾道己丑加封善利淳熙間加封靈惠慶元開禧」 38才

景定間累助順顯衛英烈協正集慶等號又夷堅
志興化軍海口林夫人廟靈異甚著今進為妃云
則在宋時已封為妃也元史祭祀志南海女神靈
慧夫人至元中以護海運有奇應加封天妃神號
積至十字廟曰靈慈祝文云年月日皇宮⁴⁸遣某官
致祭于護国庇民廣濟福惠明著天妃又續通考
云至元十五年封泉州神女護國明著靈慧協正
善慶顯濟天妃二十五年加封廣佑明著天妃七
修類藁亦謂至元中顯靈于海有海運萬戶馬合
法忽魯循等奏立廟號天妃順帝又加輔國護聖」
庇民廣濟福惠明著天妃是天妃之各自有元始

38ウ

何喬遠閩書載妃生卒興張變同又謂生時即能
乘席渡海人呼為龍女昇化後名其墩曰聖墩立
祠祀之洪武五年又以護海運有功封孝順純正
孚濟感應聖妃則又有聖妃之稱七修類藁則云
封昭應德正靈應孚濟聖妃通考永樂中建天妃
廟賜名宏仁普濟天妃宮有御製碑正月十五日
三月二十三日遣太常寺致祭故今江湖間俱稱
天妃天津之廟并稱天后宮相傳大海中當風浪
危急時號呼求救往々有紅燈或神鳥來輒得免」
皆妃之靈也竊意神之功效如此豈林氏一女子
所能益水為陰類其象維女地媪配天則曰后水
陰次之則曰妃天妃之名即謂水神之本號可林
氏女之說不必泥也張學札使球記⁴⁹又云天妃姓

39才

蔡閩海中梅花所人為父投海身死後封天妃則

又興張變何喬遠所記不同矣成化間給事中陳

詢奉命往日本至大洋風雨作⁵⁰將覆舟有二紅燈

自天而下遂得泊于島若有人告曰吾輩為天妃所

所⁵¹遣也又嘉靖中給事中陳侃奉使封琉球遇風

將覆拳舩大呼天妃亦見火光燭舩々即少寧明」 39ウ

日有粉蝶飛繞舟不去黃雀立柁樓食米頃刻風

起舟行如飛曉至閩午入浙之定海へ俱見七修類稿」吾鄉

陸廣霖進士云臺灣往來神跡尤著土人呼神為

媽祖倘遇風浪危急呼媽祖則神披^{マ、}髮⁵²而來其効

立應若呼天妃則神必冠帔^{マ、}⁵³而至恐稽⁵⁴則刻⁵⁵媽祖

云者蓋閩人在母家之稱也云々琅邪代醉編廿

九の卷へ廿二丁ウ」⁵⁶にも見え天后聖跡圖像に福建省

誌天后本傳などを載画像を著せり元詩選三

の巻に貢師泰が興化湄州島祠^三天妃^三還詩また

洪希文が題^三聖墩妃宮湄州嶼^三詩あり」40才

○與清曰船靈は船中守護の神にて一には天石楠

船神也鳥石楠船とも天鳥船ともいひて伊弉冉

尊の所^レ生也^レへ神代記上古事記上^レ二には天照大神稚日女尊

事代王命也^レへ神功記古事記神功乃段^レ三には住吉神にて神体

は表筒男中筒男底筒男三神に天照大神を加へ

又は神功皇后をも加て四所明神と申す^レへ古事記日本紀

神明⁵⁷帳万葉集延喜式二十二社注式諸神記諸社根源記^レ四には御船神御名

は御蔭川神といふ^レへ太神宮儀式帳延喜太神宮式倭姫世記神名秘書類聚神底⁵⁸

本源元々集^レ五には知夫利神也^{チブリ}由良姫神とも和多須^{ワタス}

神とも申す須勢理媛命也^レへ土佐日記貫之集袖中抄神名帳續日本後紀」40ウ

一宮記〕六には浮船神古名箕宿神也〔諸神記神社鎮座歲代考〕七
には船の精神也輕野神能登船靈の類をいふ〔神名
帳類聚国史〕此外漢神天妃佛説の守夜神水天宮また
は豐玉媛命猿田彦大神金毘羅權現などに祈請
して渡海安穩を得事也水天宮の事は覺禪抄に
見え金毘羅權現の事は余別に記せり此等の神
いづれも船靈といふべし

第四標山月日山

○續日本後紀二の卷〔天長十年十一月の条〕に戊辰御豐樂院
終日宴樂悠紀主基共立標其標悠紀則山上栽梧 41才
桐兩鳳集其上從其樹中起五色雲雲上縣悠紀近
江四字其上有一日像日上有半月像其山前有一天老
及麟像其後有一連理吳竹主基則慶山之上栽一恒春

樹^一々上^二泛^三五色慶空^一々上有^レ霞々中掛^二主基備中四
字且其上有^下西王母献^三益池圖^一及儵^三王母仙桃^一童子
鸞鳳麒麟等像^上其下鶴立矣云々

○榮花物語きなはわびしとなげく女房の卷へ印本卅三
の卷十七頁へに大じやうゑれいの月日の山ひきあや

しみものまで青摺に赤紐なまめかしうて云々

○同根合の卷へ印本卅六の卷卅四頁へに三月十よ日に四条宮^一 41ウ

に渡らせ給ひぬ狭くあつかはしき心ちす北對

をめんだうあけて西には中宮そなたのらうか

けておはしますひんがしには皇后宮おはしま

すすまひなども清涼殿にて中宮は御らんずぎ

しきありさまさるかたに見所有はだかなるす

がたどものなみたちたるぞうとましかりける

御まへにつゝみかきて月日山⁵⁹などありけり女

土俵撥

房たれにかゝ波のうへ池のつゝみはたかくとも

月日にいかでちかくなるらむとよみけり云々

○人車記仁安三年九月一日の条に内蔵権頭長光」42才

朝臣献^二大嘗會悠紀方奉文一通^一

勘申悠紀方標山并御挿頭花等本文事

標山

崑崙山上○○○○○○○○

挿頭花」

芝草壮榮○○○○○○○○

洲濱

瀛洲在^二東海之東○○○○○○

仁安三年八月廿七日正四位下行内蔵頭藤原

朝臣長光」41ウ

○類聚国史〈巻第八神祇部八〉大嘗會部に淳和天皇弘仁十

四年十一月癸亥以「宮内省」為「悠紀所」以「中務省」為「

主基所」作「借家」用之但齊場依「例定」北野「一切不」用「

玩好金銀刻鏤等之飾」唯標者以「榊造」之用「橘并木」⁶⁰

等「飾」之即書「悠紀主基字」以著「樹末」凡以「清素」供「神

態」耳云々

○貞觀儀式〈巻第二〉踐祚大嘗祭儀上に立「標四角」へ立「賢木」著「

木綿」方州八丈為「限即令」^{△下}山城國葛野愛宕兩郡司「守」^ト

之云々江家次第〈十五の巻十四頁〉大嘗會の条に顕陽承

光兩堂第一間移「立國標」云々」43才

○中右記寛治元年十一月十九日の条に今日破「却

北野齋場所云々午時許兩國引「標山」国司等著「小

忌行事并同著^レ之引^ニ入朱雀門^一立^ニ會昌門^一云々

○同書嘉承三年十一月廿一日の条に乗^ニ于私車^一馳^ニ

向^ニ二條朱雀大路^一之處標山已引入了甚遺恨也但

丹波守敦宗朝臣歩之間供人濟々一家六位以下

著^ニ布衣^一相從見物車馬道路無^レ隙近江丹波人夫相

挑引^レ之間主基山引^ニ懸見物車^一三町元遅々歩^ニ云具

中^ニ中將殿^一入^ニ朱雀門會昌門^一廻^ニ見標山^一云々

○明月記嘉禎元年十一月廿一日の条に雜人云悠^レ 43ウ

紀標昇^ニ朱雀門院^一間日像隨竜破損下人等有^レ言^{本ノマ、}不

忠懈怠也⁶¹更非^ニ朝家之恠異^一歟云々

○康治元年大嘗會記に大忌大将已下^ヘ淺履^一入會昌

門東戸^一經^ニ悠紀標東^一へ両標間坎悠紀標東坎先例未^ニ見及^一也今日經^ニ悠紀標東^一云

々

○業資王記建曆元年十一月十三日の条に今日引_二

標山於錦小路朱雀_二玉藥建曆元年十月十九日の

条に標引次第如_レ例歟

○同書建曆元年十一月二日の条に藤中納言来仰_二

左府_二云大嘗會_二兩國標引_三入南門_二而寸法不_レ叶治曆_一 44才

例不_二分明_一若自築垣_二可_三引入_一坎將又減_二寸法_一可_レ引_三入

南門_一歟兩条之間可_二計申_一者仰云大嘗宮_二へ中略_一又云

兩國標事右大臣内大臣權大納言藤原卿權中納

言藤原卿等定申云被_レ引_三入築垣_一之條一切不_レ可_レ然

元曆建久是築垣無實也今度何理今更撤_二去之_一治

曆雖_レ無_二所見_一無_二不審_一自_二南門_一引入南門歟_レ標之寸法暗難_レ

計能々被_二尋問_一可_レ被_レ引_三入之_一難_レ入者可_レ減_二山寸法_一坎

無_二指式文_一故也參議藤原朝臣定申詞大略同_二入々_一

坎但自「築垣路」可「引坎元曆建久吉例也」云々

○伏見院御記正應元年十一月廿二日の条に「兩國」44ウ

引「標山」云々

○正安三年大嘗會記に廿日標山御見物御幸父子

入「御點」云々廿日乙卯晴今日為「標山御見物」御幸

法皇上皇御同車網代庇御車御車副白張「平礼」云

々諸卿参入之路悠紀標東歟「兩標間坎標山之東

西不」同也豐樂院儀東階當「標山西」八省儀東階當「

標山東」當時官廳之東階同「豐樂院儀」然者經「標山

西」之條有「使宜」然而經「東其例多只可」依「上首進退」

坎

○永和元年大嘗會假名記に資康朝臣仲光朝臣左「45才

右の行事にて標山に供奉す小忌なから別に召

ありて殿上にてくはゝる其外実宣朝臣標山の
国司○にて同しく小忌を著す云々又云早旦
に標山を朱雀の大路より引国司とも供奉す標
は官の廳の門の左右に立る也云々又云悠紀主
基の御屏風標山以下の本文は文章博士秀長朝
臣大学頭為綱朝臣勸進す云々

○康富記永享二年十一月十八日の條に是日大嘗

祭也午剋許兩國標山自_二齋場處_一令_レ引_レ四條_一へ先々_二到_二七条_一而

永徳應永近例如_レ此_一悠紀近江國標經_二東大宮_一主基丹波標_二45ウ

西大宮_一両方供奉人史以上東大宮南行大略乗車

又或乗輿最略也両方史生官掌等乗馬輩皆西大

宮南行於_二四條朱雀_一行事史以下_二乗物_一相_二從_二両標_一

朱雀北行國司等猶乗物路次不使之故坎到_二三条_一

下_レ車于_レ茲上下整_二行列_二所々預不_レ供_二奉之_二云々未刻

標山會昌門前引_二留之_一室町殿撰政殿下へ各御衣冠_二於_二南

門下_二有_二御見物_一其南方官務居_二床子_一見_二行列_二云々標

山引人夫二百人両國守護召進云々標山供奉人

皆用_二小忌_一云々

○伊呂波字類抄二の卷部雜物門に標山へウノヤ」 46才

マ大嘗會之時引_レ之云々

○⁶³代始和抄に標山といふは大嘗宮の前に両国の

国司列立すへき所のしるしの木に大なる山を

つくりさまゝの作物を鋳て是を引立る事あ

り此作物は本文の心を用ぬ云々

○與清按に右の説ともに据れば月日の山は標^{ヘウ}の

山の事にて上に日月の像を懸たればさいふな

りけり崑崙山上云々の句を東方朔が海内十州

記へ正説部卷第六十六載^レ之^ノに崑崙在^ニ西海成地北海亥地^ニ去^レ岸

十三万里山高^ニ平地^ニ三万六千里出^ニ日月之上^ニ有^ニ九^ニ」46ウ

層^ノ毎層相去万里形如^ニ偃蓋^ノ下狹上廣と見えて日

月によしあり山海經大荒西經に大荒之中有^レ山

名曰^ニ日月山樞也^ノ吳姬天門日月所^レ入云々標は

もと郡臣儀式の庭上に列立の時將某の駒形の

杭を池に打立たるをいふ今には版ありて標の

名見えず貞觀儀式の比より坐處^ヘには版^シを置立

処^ヘには標^ヲを立しにや然^サて古の標^ヘにまねびて悠紀

主基^メ兩國列立^シ処^シの目標^ヲをことごとしく賢木

をかざり或は山形に作りなどして標の山とよ

びその風流をめど物見る人のために事はて」47才

ゝ後引ありくなるは今の世の神祭り 出車⁶⁴といふものにひとしこは大嘗會のみに限らず相撲節などにもさるさまのものつくりて列立^{メヅル}処の目標^{メヅル}にしたりけん内裏式へ七月七日相撲式の条に可^レ立^二標之験^一と見えたるはよしありげ也

第五豐受宮内宮外宮

○古事記へ上卷に伊邪那美命^{ウミマス}生^{ヒノ}火之夜藝速男神^{ヤギハヤヲノ}亦名^{ミコヲ}謂^二火之炫毘古神^{ヒノカマビコ}亦名謂^二火之迦具土神^{ヒノカグツチノ}因^{ヨリ}生^二此子^一
美蕃^{ミホト}登^ト見^ミ炙^{ヤカ}而病臥^{ヤミコヤセリ}在云々^ユ於^マ尿^{リナリマセル}成^{ミナハミツ}神名弥都波能^{ハノ}
賣^メ神次^{ワクムスビノ}和久産巢日神^{カヘリマキノ}此神之子^{ミネヲ}謂^二豐宇氣毘賣神^{トヨウケビメ}一^二47ウ
云々^{タケミカツテノ}建御雷神^{カヘリマキノ}返^{カヘリマキノ}参^{ボリテマラ}上復^{シヒキコトムケ}奏言^{ヤハ}向^{シメル}二^一和^{ヤハ}平^{シメル}葦原中國^ニ之^二
狀上^{サマヲ}爾天照大御神^{コハニアマテラスオホミカミタカギ}高木神^{タカミムスビノ}様^{コトミナ}へ高御産巢日神^{ミコトモテノ}の別名也^{リキハク}之命^{ヒツギ}以^二詔^一
子正勝^{ミコササ}吾勝^{アカツカ}々^{ハヤビ}速日^{アメノオシホシミハノ}天忍穗耳命^{イマコトムケ}今^{ツヘヌ}平^ニ訖^ニ葦原中國^一

之^{マニ}一^{マヲス}故^{コト}随^{ヨサシタマヘル}言^{クダリマン}依^{テシロシメセトノリ}賜^{キコ}一^コ降^{マシ}坐^{マシ}而^ニ知^チ看^{カン}爾^ニ其^コ太子^コ正勝^コ吾勝^コ

々^{マシ}速^{マシ}日^{マシ}天^{マシ}忍^{マシ}穗^{マシ}耳^{マシ}命^{マシ}答^{マシ}白^{マシ}僕^{マシ}者^{マシ}將^{マシ}降^{マシ}装^{マシ}束^{マシ}之^{マシ}間^{マシ}子^{マシ}生^{マシ}

出^{マシ}名^{マシ}天^{マシ}迹^{マシ}岐^{マシ}志^{マシ}國^{マシ}迹^{マシ}岐^{マシ}志^{マシ}天^{マシ}津^{マシ}日^{マシ}高^{マシ}子^{マシ}番^{マシ}能^{マシ}迹^{マシ}々^{マシ}

藝^{マシ}命^{マシ}此^{マシ}子^{マシ}應^{マシ}降^{マシ}也^{マシ}此^{マシ}御^{マシ}子^{マシ}者^{マシ}御^{マシ}二^{マシ}合^{マシ}高^{マシ}木^{マシ}神^{マシ}之^{マシ}萬^{マシ}幡^{マシ}

豐^{マシ}秋^{マシ}津^{マシ}師^{マシ}比^{マシ}賣^{マシ}命^{マシ}一^{マシ}生^{マシ}子^{マシ}天^{マシ}火^{マシ}明^{マシ}命^{マシ}次^{マシ}日^{マシ}子^{マシ}番^{マシ}能^{マシ}迹^{マシ}々^{マシ}

藝^{マシ}命^{マシ}也^{マシ}是^{マシ}以^{マシ}隨^{マシ}二^{マシ}白^{マシ}之^{マシ}一^{マシ}科^{マシ}二^{マシ}詔^{マシ}日^{マシ}子^{マシ}番^{マシ}能^{マシ}迹^{マシ}々^{マシ}藝^{マシ}命^{マシ}一^{マシ}此^{マシ}豐^{マシ}

葦^{マシ}原^{マシ}水^{マシ}穗^{マシ}國^{マシ}者^{マシ}汝^{マシ}將^{マシ}知^{マシ}國^{マシ}言^{マシ}依^{マシ}賜^{マシ}故^{マシ}隨^{マシ}命^{マシ}以^{マシ}可^{マシ}二^{マシ}天^{マシ}降^{マシ}一^{マシ}48才

爾^{マシ}日^{マシ}子^{マシ}番^{マシ}能^{マシ}迹^{マシ}々^{マシ}藝^{マシ}命^{マシ}將^{マシ}二^{マシ}天^{マシ}降^{マシ}之^{マシ}時^{マシ}云^{マシ}々^{マシ}於^{マシ}是^{マシ}副^{マシ}二^{マシ}賜^{マシ}

其^{マシ}遠^{マシ}岐^{マシ}八^{マシ}尺^{マシ}勾^{マシ}璫^{マシ}鏡^{マシ}及^{マシ}草^{マシ}那^{マシ}藝^{マシ}劍^{マシ}亦^{マシ}常^{マシ}世^{マシ}思^{マシ}金^{マシ}神^{マシ}手^{マシ}

力^{マシ}男^{マシ}神^{マシ}天^{マシ}岩^{マシ}門^{マシ}別^{マシ}神^{マシ}一^{マシ}而^{マシ}詔^{マシ}者^{マシ}此^{マシ}之^{マシ}鏡^{マシ}者^{マシ}專^{マシ}為^{マシ}二^{マシ}我^{マシ}御^{マシ}魂^{マシ}一^{マシ}

而^{マシ}如^{マシ}二^{マシ}拜^{マシ}一^{マシ}吾^{マシ}前^{マシ}二^{マシ}伊^{マシ}都^{マシ}岐^{マシ}奉^{マシ}次^{マシ}思^{マシ}金^{マシ}神^{マシ}者^{マシ}取^{マシ}二^{マシ}持^{マシ}前^{マシ}事^{マシ}一^{マシ}為^{マシ}二^{マシ}政^{マシ}

此^{マシ}二^{マシ}柱^{マシ}神^{マシ}者^{マシ}拜^{マシ}二^{マシ}祭^{マシ}佐^{マシ}久^{マシ}々^{マシ}斯^{マシ}侶^{マシ}伊^{マシ}須^{マシ}受^{マシ}能^{マシ}宮^{マシ}一^{マシ}次^{マシ}登^{マシ}由^{マシ}

宇^{マシ}氣^{マシ}神^{マシ}此^{マシ}者^{マシ}坐^{マシ}二^{マシ}外^{マシ}宮^{マシ}之^{マシ}度^{マシ}相^{マシ}一^{マシ}神^{マシ}者^{マシ}也^{マシ}云^{マシ}々^{マシ}延^{マシ}曆^{マシ}廿^{マシ}三^{マシ}

年等^{トユケ}由氣太神宮儀式帳に今称^{ワタラ}二度會宮^一在二度會郡

沼水郷山田原村^{ヌキノ}云々天照坐皇太神始^{ハジメマキムクノタマキノ}卷向玉城

宮御宇天皇御世國々^{クニノミヤドコロマギタマフツキワタラヘノ}處々大宮處求賜時度會^ハ

宇治^{ウヂ}伊須^{イヌ}乃^ハ河上^{カハラ}大宮^{オホミヤ}供奉^ノ爾時大長谷天^{ニツカヘマツルツノトキオホハツセノ}48ウ

皇御夢^{ミイメニサトシヲシヘタマハクアレ}誨^ミ覺^ミ賜^ミ吾高天原坐^{マシマ}見^ミ真岐^{ギタマヒシ}賜^志

處^{ニシヅ}志都真利坐^{マリマシヌシカレトモアレヒトコロノミマセバ}然^イ吾^ナ一所耳坐^イ甚苦^{シカクミナラス}加^ナ以^キ

大御饌^{オホミケモヤスクキコシメサズマサガユエニタニバ}安不聞食^マ坐^ナ故^ナ丹波國比治^{マナ}真奈井^{キニ}

坐我御饌都神等^{マサアガミケツト}由氣大神^{ユケオホカミヲアガリモガトヲシヘサトシマツリキ}我許欲^ミ誨^ミ覺^ミ奉^ミ

爾時^{ソノトキ}天皇^{オドロキ}驚悟^ミ賜^ミ即從^ミ二丹波國^{シメ}一^イ令^ミ二行幸^{イデマサ}一^ミ度會^{ミデ}

山田原^{ヤマノ}下石根^ノ宮柱^{ミヤハしら}太知立^{フトシリタテ}高天原^{ニヒギタカ}比疑高^{ヒギタカ}

知^{シリデミヤ}宮定齋仕奉始^{マツリ}是以御饌^{ミケドノ}殿造奉^{ミデ}天照坐^ミ

皇太神^ノ朝^{アハタノオホミケ}大御饌夕^ミ大御饌^ミ日別^{ヒゴトニ}供奉云々

丹後國風土記に丹後國丹波郡^{タニハ}々々家西北隅^{グウケ}方有^ミ

比沼里^{ヒヌ}「此里比沼山^{イヌバキニ}頂^ニ有^レ井其名曰^ニ麻奈井^{マナキ}今既成^レ」49才

沼此井天女八人降^{アマクダリテミツア}来浴^{ミスニ}水于^レ時^ニ有^ニ老夫婦^ニ其名曰^ニ

和奈佐^{ワナサオキナ}老夫和奈佐^{ワナサオムナ}老婦^ニ此老等^ニ至^ニ此井^ニ竊取^{カクス}藏^天

女一人衣裳^ニ即有^ニ衣裳^ハ者^{ソラニ}皆^ニ天飛上^ニ但尤^ニ衣裳^ニ女娘^{トメ}

一人留身^{トリトマリ}隱^{カクレテ}水而獨懷^{ミツニ}慙^{ヒトリハデオモヒテヨリスコハニ}居^ニ爰^ニ老夫謂^ニ天女^ニ曰^ニ吾无^レ

兒^{アマツ}請^{ヨトメ}天女娘^{トメ}汝為^レ兒^ニ天女答曰^ニ妾獨留^ニ人間^ニ何敢不^レ

從云々老夫增^{オコシテイカリオモフ}發^{サラシメシ}願^ニ願^ニ去^ニ天女流^{ヤウヤク}淚^{カドノミ}撤退^ニ門外^ニ云々

復至^{マタ}竹野郡^{タカノ}船木里^{フナキ}奈具村^{ナグノムラ}即謂^{ムラビトラ}村人等^ニ云^ニ此處我

心^{ナグシ}奈具志^ニ之^ハ古事平善者^ニ云^ニ奈具志^ニ乃留^{トク}居^ニ此村^ニ斯所謂^ニ竹野

郡^{トヨウ}奈具社^{カノ}坐^{ヒメ}豐宇賀^ニ能賣^ニ命^ニ也云々^ニ元々集七^ニの卷^ニ古事記裏書塵

添璫囊抄四^ニの卷^ニなどに引用し倭姫世記神鎮座傳記廿二社注式廿二社本縁類聚神底本源

書神」49ウ

記諸社根元記の類にも此文を取れる所あり皇字沙汰文へ上卷へ延喜十四

年正月解に丹波國興佐小峴ヲグキノ此沼魚井坐道主王マナキ

子八乎止女乃齋ヤヲトメノイツキマツルミケツカミノトユケノ奉御饌都神止由居太神云々又

皇大神朝御饌夕御饌供奉本記に丹波國与佐ヨサノ

比沼ヒヌ魚井坐道主乃マナキニマスマシテノウシノ王子八乎止女ヤヲトメノイツキマツル齋乃奉御饌都

神止由居トユケノ神云々此外正タマシき古書の説みな天照

太神の御饌神ミケツにて朝夕アシタユウベの神饌奉カンミケる豊宇賀能賣トヨウウカノメノ

命也神樂歌にも阿女アメ仁末須止ニマストヨヲ与遠加比女カヒメ乃美

也ヤノミテガラ乃美天久良なとよみてやんごとなき大神には

おはしませど天照太神に仕奉給ふ神なることは」50才

疑ウツなし然るサを神道五部の書をはじめ外宮を引

たる書どもにさまゝアマサヘにいひまげアサ剩本居宣長

が古事記傳へ十五の卷へにも中へツカに天照太神此神に

御饌ミケ奉タテマツり仕へたまふよし牽強シヒゴトしてなほ外宮に

諂^{ヘツラヘ}るは学者のしわざにあらず豊受^{トヨウケ}を止^ト与^{ヨウ}宇氣^{ウケ}

豊宇氣^{カヨ}なども書き与^{ヨウ}宇^ウを切^{ツバメテ}て止^ト由氣^{ユケ}とも宇^ウを

通^{カヨ}はして止^ト与^{ヨウ}遠加^{ヲカ}ともいふ豊^{トヨ}は大にて美祢^ミ也

宇氣^{ウケ}は宇賀^{ウカ}とも省^{ハブキ}て氣^キとのみもいへり私記^{シキ}へ釋日^{シツ}

本紀十六の卷^{マク}に宇氣^{ウケ}者食^ハ之義也と見ゆ按^ハに受^{ウケ}の義に

て食物^{クヒモノ}は腹中^{ウケイル}に受服^{ウケイル}る物なればいふみけつもの」50ウ

も津^ツは助字^ツにて御受津物^{ミケツモノ}の義也饌食^{シユ}などの字

をミケミケツミケツモノと訓^{ヨメ}るにても知^{シル}べし

食物^{クヒモノ}の久^クも受^{ウケ}が本語^クにて比^ヒは久^ク比^ヒ久^ク不^フ久^ク敵^ヘと

活用添言^{ハタラクソヘコトバ}也久^クと計^ケは通音^{フス}也また食^シといふは口

より受^{ウケ}入^イる食^シをしかと胃中^{スエオクコハロ}に納居心^{ナゲクウ}也すべて

和^ワ為^キ宇惠呼^{ウエエヲ}の一行^{スエオクコハロ}は居置^{スエオクコハロ}意^イある語也然^サて豊受^{トヨウケ}

宮^{ミヤ}を外宮^{ナゲクウ}といひ歌^{ウタ}にも内外宮^{ナゲクウ}をうちとの宮^{ミヤ}とも

よみて外宮トツミヤの名はやく古事記へ已に引用せりへにも出た

れどそは内宮中の行幸イデマシある宮の事にて今の外

宮にあらず神名秘書に村上天皇御宇祭主公節」51才

之時皇大神者奥座マスカ之故号内宮一度會宮者外座之

故申外宮始出^レ自^ニ此時^一也とあれば村上の御代よ

り内宮外宮の称はおこれるなるべしと古事記

傳へ十五の卷へにみゆ正タマシきものには西宮記に内宮外宮

と書たるをや始とせん三代實錄へ五の卷へに内宮と

あるは誤にて古写本に同宮とあるをよしとす

宮号は殊に靈驗ある皇祖神に奉る例なれと豊

受宮は天照太神御親オンタシミ深く迎取ムカヘトリ給へる御饌ミケツ神な

れば宮号もとより論なし臣下の神には鹿嶋香

取の大有功の神の外はたえてきこえず伊勢の」51ウ

高宮は豊受宮の荒魂なれば皇祖神ならねど宮

号宣下ありけるなり

第六總社六所大明神一宮二宮三宮四宮五宮

六宮武藏六所分配宮相模六所宮

○武藏國相模國共に總社六所明神あり吾妻鏡へ一の

卷治承四十六の条に武衛今夜至_二于相模國府六所宮_一於_二

比所_一被_レ奉_レ寄當國早河庄於宮根權現云々またへ二の

卷寿永二七十一の条に御臺所有_二御産氣_一為_二御祈禱_一被_レ立_二奉幣

御使於近江國宮社云々武藏六所宮へ葛西三郎云

々へ此外武藏相模の六所宮の事吾妻鏡源平盛衰記等をはじめて所見おほしこを」5

2
才

六所分配宮ともいふは總社中に六所の神を分

配して祭れるゆゑ也馬揃草子に武藏國とかや

こふのろくしよぶんばいの宮のまへにてちや

くたうつけて見給へは云々未来記草子に頼朝

主従七騎にて武蔵国へたち給ふこふのろくし

よぶんばいにてはたをなびかせつゝく味方を

まちたまふ云々と見え分配河原へ太平記十の巻梅松論上巻鎌

倉太草子下巻相州兵乱記一の巻といふも此社辺の河原なれ

ば然唱るを新安手簡に國分寺の背なれば分背

の義といへるはいとく拙劣の説也六所の神」52ウ

は神道集へ三の巻武蔵六所明神事の条に抑此六所

者一宮小野大明神申本地文殊也云々二宮小河

大明神申本地薬師如来是也三宮火河大明神申

本地観音也四宮ヲバ秩父大井申本地毘沙門天

王也云々五宮金讃大明神申本地弥勒并是六宮

梶山大明神申本地大聖不動明王是也云々私案

抄応永十九年初冬勸進沙門運祐請_下殊蒙_二十方且

越恩施_一開_二八軸妙經印板_一施_二入武州多西郡小河郷

二宮社頭_一救_二六趣群萌_一幡_中十方皆成妙益_上狀に抑當

社小河大明神者當國六所随一本_二地薬師之應跡_一」53才

也また正長二年卯月權少僧都光運請_下於_二武州惣

社六所大明神御寶前_一書_二寫紺紙金泥大般若經_一

部六百卷_一奉_二社頭施入_一祈_中天下安全万民快樂_上志趣

發願文に一宮小野大明神者大聖文殊垂跡也云

々と見え小野大明神は神名式に多磨郡小野神

社云々三代実録へ四十六の卷へに元慶八年七月十五日

授_二武蔵国従五位上小野神正五位上_一云々和名抄

へ六の卷へに武蔵國多磨郡小野へ乎乃へ云々とあり今府中

より玉河を隔て西南方一里許に一宮村一宮大明神とて本地文殊菩薩の社あるこれ也政治要」53ウ

略西宮記北山抄江次第年中行事秘抄拾芥抄の類に八月廿日牽^二武蔵小野御馬^一よしみやこは一

宮村より南方一里餘に小野路とて山野多き里ありそこにも小野大明神といふ古社ありて古

き金口⁶⁶の銘ありへ相模國三浦郡浪間村梅宝院といへる曹洞宗の寺の洪鐘銘に

武州小山田保小野路村小野大明神とありこは戦國に奪^セ行^キしものなるべし其間に関^{セキ}

戸^ド乞^ウ田^ダ貝^{カイ}取^{ドリ}などいふ村つゞきていづれも山野

の地なれば此わたりすべて小野郷内にて数も

ありけん所なるべし二宮小河大明神は神名式

に多磨郡虎柏神社あり古寫本に虎泊に作れる」54才

もあれど共に男河を草書より誤れる也武蔵地

名に男の字を用ひしは男衾など例あり今布田

宿の東北方の佐津村なるよしもなき櫟社を虎

柏神社也といへるはえせものゝいひ出たる説

にてうけがたし男河神社は今摩川⁶⁷の西の二宮

村にあり倭漢三才図會へ六十七の卷に社頭十五石と

いへり火河大明神は式に足立郡氷川神社へ名神大月

次新嘗云々三代実録へ二の卷に貞觀元年正月廿七日

授武藏國從五位下氷川神從五位上云々又へ七の卷

貞觀五年六月八日授武藏國從五位上氷川神正^二54ウ

五位下云々又へ十一の卷貞觀七年十二月廿一日授武

藏國正五位下氷川神從四位下云々又へ十六の卷貞觀

十一年十一月十九日授武藏國從四位下氷川神

正四位下云々又へ卅四の卷元慶二年十二月二日授武

蔵國正四位下氷川神正四位上^二云々一宮記に氷

川神社[〓]素戔嗚尊[〓]武蔵足立郡云々卜部兼俱神名帳頭

注に武蔵足立郡氷川社日本武東征之時勸^二請素

戔嗚尊^二云々慕京集に氷川の社寺納和哥す[〓]

められ侍りて残雪といふことをよめるおいらく

の身をつみてこそ武蔵野の草にいつまで残^レ」55才

るしら雪云々今大宮宿にありて倭漢三才圖會

〈六十七の卷〉に社領五百石といへり武蔵濱路〈足立郡の部〉

には三百石當所を高鼻村と云と見ゆ神社圭田

録にも足立郡大宮領三百石あれば三才圖會は

誤れり高鼻は大宮宿の東につゝきたる村之秩

父大菩薩は式に秩父郡秩父神社云々三代実録

〈廿の卷〉に貞觀十三年十一月十日授^二武蔵國正五位

上勲七等秩父神從四位下^二云々又^一卅四の卷^一元慶二年

十二月二日授^三武藏國從四位上勲七等秩父神正

四位下^一云々舊事記⁶⁸〈三の卷〉天神本記に天下春命武^一 55ウ

藏秩父國造寺祖云々又^一十の卷^一國造本紀に知々夫

國造端籬朝御世八意思全神十世孫知々夫命定^二

賜國造^一拜^三祠大神^二云々續日本紀^一〈四の卷〉に和銅元年

正月乙巳武藏國秩父郡獻^三和銅^二云々万葉集^一〈廿の卷〉

に助丁秩父郡大伴部少歳云々万葉集菅原孝標女の更

科日記歌にこしのひをきてにつけてもとめに

きしちゝぶの山のつらきあづまち云々などみ

え今秩父郡大宮妙見宮とて社領五十七石ある

よし武藏演露^一秩父郡の部^一圭田録などにいへり金讃

大明神は式に児玉郡金佐奈神社^一名神大^一云々三代^一 56才

実録〈六の巻〉に貞觀四年六月四日武藏國正六位上

金佐奈神列_二於官社_一云々八月六日授_二武藏國正六

位上金佐奈神從五位下云々今児玉郡金鑠村に

あり梶山大明神は式に都筑郡杵山神社云々續

日本後紀〈七の巻〉に承和五年二月庚戌武藏國都筑

郡杵山神社預_二之官幣_一以靈驗_二也云々又〈十八の巻〉承和

十五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從五

位下_二云々今都筑郡八朔村に杵山大明神とてあ

り八朔は和名抄〈六の巻〉に都筑郡針圻〈罰佐久〉とみえ

ける郷也こゝに限らず郡内杉山明神の社おほ」56ウ

かれど八影⁶⁹なるを旧地とす一宮二宮などは國

司巡拝の次第にやされど一宮記には國中第一

の明神⁷⁰氷川を一宮とし總社六所には小野文珠

井を一宮とし氷川を三みやとすれば一宮なきが

ごとし必竟は事とあるをり一宮二宮三宮など順

に其事に預り自余は甲乙なく一国に其事に預

れりと見ゆ總領總撰の義にはあらで總フサネ

合アハスルの意なるべしされば六所分配宮ともいへる

也六所のみならず三所四所五所七所九所十一

所など配祀せる社おほかり國府鎮守の總社寺」57才

内鎮守の總社のよし也私案抄へ正長二年光運か歌文」に蓋

以謂之六所大明神之効驗無非盤若功力司ニ揭諦

一部之惣接奉號惣社」表ニ六百軸王之真文」称ニ六所

明神」云ニ法理」云ニ神德」誰不ニ歸敬」乎云々から糸草子

にまんじゆ奉り武藏の六所別當のものにて候

おやを名のり申まじ云々ともありて別當の仕

奉りし社なればもとは國分僧寺中の総社など

にやありけん山槐記へ治承二年十一月十日の条に於常光院

惣社有八女田楽云々又へ治承三年十月二日の条蓮華王院惣

社祭云々又へ十一月十日夕条東山堂惣社上棟云々玉海へ大治57ウ

三年十月三日の条に蓮華王之内總社祭云々又へ同四年正月一

日の条に寅刻自方違所歸来即改著東帶有四方拜

事寝殿南階儲其座四隅舉燈如例先向北跪唱属

星名七篇⁷²云々次惣社向南已上自天至太白再拜

自陵至惣社兩段再拜云々明月記へ天福元年七月七日の条に

川崎惣社祭云々百練抄⁷³へ安元々年六月十六日の条に蓮華王

院惣社鎮座八幡已下廿一社云々又へ承久元年四月二日の条

法成寺總社云々又へ寛文二年八月廿二日の条法性寺成就宮

へ東福寺鎮守被始行祭禮云々⁷⁴帝王編年記へ後嵯峨院寛元々年三月

十五日の条〉に東福寺惣社遷宮也奉^レ号^ニ成就宮云々倭^一 58才

漢合運〈醍醐天皇延長三年の条〉に多武峰總社立云々⁷⁵ 山家要

略記へ一の卷〉に二門相即集云故十禪師者諸神之總

社衆生五体也云々日吉社神道秘密記に惣社曰

本国大小神祇鎮座御神体山王七社伊勢八幡春

日社〈并〉諸神勸^ニ請之云々諸社根元記に西惣社十

三社云々仙洞法住寺殿御鎮守号^ニ蓮華王院惣社^一

云々吾妻鏡へ九の卷四丁左〉平泉領寺⁷⁶塔已下注文に鎮守

事中央惣社東方日吉白山兩社南方祇園社王子

諸社西方北野天神金峰山北方今熊野稻荷等社

也委⁷⁷以模^ニ本社之儀云々北条九代記へ七の卷〉に昔佛^一 58ウ

法コノ国に流^{ツタ}ハリシヨリ國郡ニ祈願所ヲタテ

菩提所ヲツクリテ家々コレヲ崇敬ス云々一國

ニ惣社アリ神護寺ト号ス國司ノ祈願所トシテ

社領ヲ付ラル云々⁷⁸ などあるをおもふにかにか

くに寺院鎮守のよし也⁷⁹ 後には本義に乖^{ソム}き總領

の勢ある社のやうに心得て⁸⁰ 宣胤卿⁸¹ へ永正七年十二月十二日

の条へに近江國神崎郡小幡社可^レ 奉^レ 号ニ惣社大明神^一と

見え⁸² かしこの惣社こゝの惣社と自称しほこら

ふ神社おほくなれるはかたはらいたきわざ也

類聚国志⁸³ 豆波多總社長明四季物語 へ四月の条へ賀茂總^一 59才

社の説は古をしらざる未練者の偽作なれば取

にたらず へ和学弁四の巻に類聚国史残缺七十卷許なるを近頃京都の好事者傳撰して

全部二百卷にせるよしいへりへ 相模國の總社六所宮はたおな

じ義なるべし吾妻鏡 へ十二の巻建久三八九の条へに御臺所御

産氣相模國神社佛寺奉^ニ神馬^一被^レ修^ニ誦經^一云々惣社

〈柳田〉一宮〈佐河大明神〉二宮〈河勾大明神〉三宮〈冠大

明神〉四宮〈前取大明神〉云々一宮巡詣記〈六の巻〉に五

月五日六所社に五社の神輿集惣社六所大明神

〈相州國府柳田といふ大磯と小田原の間〉一間⁸⁴〈一宮大明神高座郡宮山といふ馬入

川末一

里余別當藥王寺〉二宮〈二宮大明神川輪村といふ梅沢の後半里余〉三宮〈三宮大明神
板〉59ウ

戸といふ伊勢原の後十町余〉四宮〈四宮大明神大往郡一宮の川向別當鏡智院〉五宮
〈八幡

大往郡八幡村云馬入渡の西岸〉云々倭漢三才図會〈六十七の巻相模国郡〉

に寒川社在^三高座郡一宮村^二社領百石別當真言安

樂寺二宮在^二宮村^一社領五十石三宮在^三三宮村^二社

領十三石六所明神在^三嶋野^一社領五十石信勝院云

々へ按倭漢三才図會国郡部は国華万葉集記に据て増補せる也されは一宮別當藥王寺を安樂院

として国宮八幡村を品川村とし六所明神国府村を嶋野と書る皆万葉集⁸⁵の誤を襲たるなり

神社圭田録へ相模国部へに高座郡一宮領百石別當藥王

寺愛甲郡二宮領五十石神主左門へ按愛甲郡は陶綾郡の誤りなれ

どかゝる例いとおほしそは當時の神主別當な

どがゆくりなく申せる詞のまゝに御寄附證文」60才

を得れば也神主には二見神太郎景敬とて余が門人なり左門は神太郎か先祖なるべしへ大住

郡白根郷三宮領十石別當能満寺へ按白根は三宮村より東南の

方にて伊勢原との間にありへ陶綾郡六所明神領五十石別當真

勝寺大住郡八幡^{ヤハタ}坐八幡領五十石別當光圓坊同

郡四宮領十五石別當鏡智院云々とみえて總

社柳田六所明神は陶綾郡小磯の西国府新宿と

て國府村の新田ありそこに御旅所の社あり本

社は北につゞきたる生沢村也別當眞勝寺は小

磯の内中丸と云所にあるよし東遊行囊抄へ十四の上

卷〉に見ゆ一宮佐河大明神は佐牟川を省ていへ」60ウ

る也四季に高座郡寒川神社へ名神大〉云々續日本後紀

へ十六の卷〉に承和十三年九月丙午奉_レ授_二相模国無位寒

河神從五位下_二云々文德實錄へ六の卷〉に齋衡元年三

月戊戌加_二相模国寒河神從四位下_二云々三代實錄

へ十六の卷〉に貞觀十一年十一月十九日授_二相模国從四

位下寒河神從四位上_二云々又へ四十六の卷〉元慶八年九

月廿一日授_二相模国從四位上寒河神正四位下_二云

々一宮記に寒川神社へ八幡也相模高座郡云々和名

抄へ六の巻に高座郡寒川へ佐無加波云々など古書所見お

ほし二宮は式に餘綾郡川勾神社とあり三宮は」61才

大山の麓子安村の東に三宮村あり神戸白根日

向なども近村なりこれ式の比々多神社にや和

名抄大住郡郷名に日田あり日向は似かよひて

きこゆ四宮は大住郡四宮村にあり平塚八幡よ

り田村厚木などへ行道の間也式に大住郡前鳥

神社和名抄に前取郷見えたるこれ也五宮は八

幡村の八幡也その辺松林しげりてはてをしら

ず八幡山といふ盜賊のすみかとて土人おそれ

あへりそもく武蔵の總社六所は式内の六社

を配祀し相模の總社六所は式内の五社に式」61ウ

外の柳田を加て配礼せりと見ゆ相模のも國府
近辺にて國分寺中の總社なりけんもはかりが
たし國分尼寺の跡は厚木の東相模川をへだて
ゝ高座郡國分村にあり國府より四里許の所也
武藏の國分尼寺も橘樹郡影向寺とて残れり府
中より四里許南方多麻川を隔たる所也かく國
分僧寺尼寺の処を別られたるも古代の遠慮也
河内志へ十四の卷志紀郡の部へに總社式外在^二國府村古昔國
府必建^レ社有^レ事^三于國內官社^一則國司率^二僚属^一先修^二典
禮於此^一其儀猶^二京師神祇官^一然といひ和訓栞へ十三の卷^一 62才
曾の部へにも此説をむべなひげに書たれどいかゞ
あらん

第七むさ上^{カミ}むさ下^{シモ}武藏相模駿河佐泥^{サネ}佐斯^{サシ}

○賀茂真淵説に相模武蔵もと一ツにて牟佐^{ムサ}なるを

上下に分て牟佐^{ムサ}上牟佐^{サカミムサ}下と云その上は牟^ムを略^{ハツ}

き下は毛を略ける也凡て牟佐^{ムサ}てふ地名國々に

多く又東の國々とは上総下総上野下野などの如

く上下に分例也とあるはうけがたきよし古事

記傳へ七の卷にいへり又へ廿七の卷景行の条に佐泥佐斯佐賀牟^{サネサシサカム}

能哀怒^{ノヲヌ}の注に佐泥佐斯^{サネサシ}は相模の枕詞とは聞ゆ」62ウ

れどもいかなることゝも未^レ考試^{シヒ}に強ていはゞ佐

斯は國の名にて佐泥^{サネ}は真^マと同^{オナジ}く誉^{ホメ}たる言^{コト}なら

んか即真字を佐泥^{サネ}ともよみさねかづらなども

真^マかづらと云意の名と聞ゆ其^ソをさなかづらと

も云は稲を伊那余^{カナナ}を加那と云格也又万葉へ十四に

萱^{カヤ}を佐祢^{サネ}加夜ともよめりされば佐斯^{サシ}てふ國を

ほめて佐泥佐斯とは云ならんさて佐斯を國の

名と云駿河相模武藏の地を総て本を佐斯の國

とぞ云けんを二ツに分けて相模武藏とはなれるな

らん駿河は後に相模より分たるにて此記に倭」63才

建命至二相武國一之時其國造詐白於二此野中一有大沼一

住二是沼中一之神甚道速振神也於レ是看二行其神一入二坐

其野一余其國造火著レ野故知レ見レ欺而解二開其姨倭比

賣命之所レ給囊口一而見者火打有二裏一於レ是先以二其

御刀一苅二撥草一以二其火打二出火一著二向火而焼退還

出皆切二滅其國造等一即著レ火烧故於レ命謂二焼遣一也云

々書記には是歳日本武尊初二至駿河其処賊陽レ從

レ之欺曰是野也麋鹿甚多云々臨而應レ狩日本武尊

信二其言一入二野中而覓レ獸賊有二殺レ王之情一放レ火烧二其野一

王知^レ被^レ欺則以^レ燧^{ヒワチ}出^レ火之向焼而得^レ免王曰始被^レ欺」 63ウ

則悉焚^ニ其賊衆^ニ而滅^レ之故號^ニ其処^ニ曰^{ヤキツ}「焼津」^一とあり抑

此事書記⁸⁷にはかく駿河とありて其跡の地名な

ども駿河國に現しくて在^{アル}を此紀に相武^{サガ}としも

あることは人の疑ふべきなれども古語拾遺に

も倭武尊東征之年到^ニ相模國^ニ遇^ニ野火^ニ即以^ニ此劍^ニ薙^レ

草得^レ免更名^ニ草薙劍^ニ也^一〈帝王編年記にも此を相模國にての事とせり〉とみ

えたり此は國の違へるにはあらずたゞ古と後

と名の変れるのみにして実は一ツなり上代には

駿河國と云大名は無^{ナク}して^{ナク}駿河と云はもと一郷の名にして駿河郡駿

河郷これなり然るを其郷名を取て郡名とし國の大名にもせるなり^サ其國の地」 64才

までかけて大名をば相武^{サガム}と云て此倭建命の時

もいまだ駿河と云大名はなかりけん^{オホナ}〈彼駿河風土記に御

間城入彦天皇三年割二伊豆國一而為三分國と云へれども例のうけがたし故此記などは當時ソノカミのまゝの傳ツタえにて相武サガムと記し書紀は後に分ワカれたる國名を以て記されたるもの也かくて其相模と云名は佐斯上サシカミの斯を省き武蔵は身ム佐斯サシの意なるべし古書どもに身刺と多く書カケり身とは中ムに主とある處に云屋ヤの中ムネに主とある処を身屋ムヤと云がごとし後に母屋モヤと云は牟夜ムヤを訛アヤマれる也されば武蔵は佐斯國サシの内に主とある真マ」64ウ原ハラの地なればかくは名づけつらん佐サを濁るは連便ナツクなりさて一國を二ツに分て名る例或は前後或は上下といふぞなべての例なれども又丹波を分て丹波丹後といふは後コに對ムカへて丹前とはいはざれば此佐斯國サを分ワケたるも佐斯上サシカミに對ムカへ

て佐^サ斯^シ下^モとはいはざるも例あること也さて佐^サ泥^ネ

佐^サ斯^シ佐^サ賀^ガ牟^ムとつゞけ云フは御^ミ吉^ヨ野^シの吉野佐^サ檜^ネ前

檜^ネ前^ニなど云例のごとし延佳云祐下斯上脱^ニ泥字^一

乎下卷輕皇子歌に佐^サ泥^ネ佐^サ斯^シ佐^サ泥^ネ弓^テ婆^バ万葉集に左^サ

宿^ネ左^サ寐^ネ弓^テ許^コ曾^ソといるはわろし此^コはきねくし」65才

と云ては末の句にかなはず又契沖云相模の枕

詞也未^レ詳今按に旧事紀并此^ニ記に武蔵を胸^{ムナ}刺^{サシ}と

書^{カキ}たれは牟^ム泥^ネ佐^サ斯^シを略^{ハブ}て牟^ム佐^サ斯^シとは云なれ

ば今は胸^{ムナ}刺^{サシ}の牟^ムを略^{ハブ}て云へるにや武蔵相模は

もと一^ツにてあるべければかくはつゞけたるに

や相模は武蔵より小^チければ狭^サ胸^{ムナ}刺^{サシ}と云りとい

へれど此記には武蔵は牟^ム邪^ザ志^シとこそ書たれ胸

刺とは書たることなし旧事紀にも牟^ム邪^ザ志^シと胸^{ムナ}刺^{サシ}

とは別に挙たりいかゞ又師云へ真淵説也へ佐は發語泥
は奴に通ひ奴と牟とは又通へば牟佐斯也古武」65ウ
藏と相模と一國にて分れぬ時にはかくもよむ
べしといはれたるもいかゞ牟佐斯を泥佐斯と
いかでか云べき又或人相模國は小き峰の多き
國なるによりて小峰刺の意也刺は立なりと云
るもいかゞ又己も前に思へるは佐は例の眞の
意泥は峰にて富士山を眞峰とほめ云佐斯は立
ならん駿河もと相模なれば富士山を以て枕詞
とせるなるべしと思ひしもわろし相模てふ國
の名の義未^レ考上に誠に云へる考によらば佐斯
上の斯を省ける也賀と濁るは連便也賀牟は上
の意なる故に佐賀美とも云にやあらん凡て上

66才

神^{カミ}などを加年と云は下に言^{ツバ}の連^ツく時の事なれ
ば此國の名も佐^サ賀^ガ牟^ムと云はもと佐^サ賀^ガ牟^ムの國^サ佐^サ
賀^ガ牟^ムの小野^{ヲノ}など連^ツ言^ミ時^{トキ}の唱^{ナゲ}にぞありけんや、
後の風土記に嵯^サ峨^ガ身^ミと云説を拳^{ケン}たれど信^シられ
ず又或説に此國は足柄箱根より見^ミ下^{オロ}す故に坂
見の意也といふもわろしといひたりき與清按
に武蔵相模もと一國ならんといふは相武國と
あるに依てふとおもひ得たる説なるべし駿河
までも一國ならんといふは佐^サ泥^ネ佐^サ斯^シの枕詞を「
解^{トカ}んとて出来^{イデ}し説也相模駿河一國ならんとい
ふは紀記拾遺等を考合て證據正しき確説也名
義^{トキ}を解^{トキ}たるはいとくおぼつかなし相模は和
名抄に甲斐國都留郡相模郷ありこれ出処にや

陸奥色麻郡相模長門美祢郡作美播磨賀茂郡酒

見なども考合て説を立べし武蔵は豊後大分郡

武蔵同國岡崎郡武蔵結貽録へ中卷蛇ハミの条に信州武

蔵野など同名あり上総國武射もよしありけに

きこゆ

此一巻後ニ蠅川越中州刺史君命ニ所ニ注進也」67才

第八羅生門金札

○東寺什物に渡邊綱が羅生門の金札とてあるよ

し世に其模本をもてはやせりされどいとゝうけ

がたきものにてもとは羅生門謡曲又は前太年

記などによりて作り出たるものとみゆ其本の

書に云 東寺之什物也 曰ニ渡邊綱之金札ニ一枚板

也厚二寸許也惣躰両朽而文字高板之裏中有ニ豎

柱之跡「上笠木少々残有且有」釘一本「從」天延二年「置」

寛保三「へ癸」亥年迄「七百七十年成也此年 將軍

吉宗公「因」公尋⁸⁸「從」東寺長者職安井門跡「下」武城「へ臣」」 67ウ

渋谷山城守良信寫「之圖也可」秘此図は誠文武之

徳而變化退治之 勅驗也於今是以有「轉魔之神

妙」也可「懼敬白文字

勅誼

羅生門變化

為退治蒙此

札畢

天延二年

二月

撰津守源朝臣」 68才

かくのごとくあり羅城門を羅生門と書たるも

誤なり又蒙「此札」といへることいかなる心にか金

札も禁札とこそいふべけれかたゞ取用^ッへも⁸⁹

あらぬえせごとなり羅生門謡曲につはものゝ

まじはりたのみある中の徳えん哉云々九条の

羅生門に鬼神のすんでかへるれば人のとほらぬ

よしを申候云々いや保昌にたいしやしんはな

けれとも一つは君の御ためなればしるしをた

べと申けり実^ガに綱が申ごとく一ッは君の御ため

なればしるしをたてゝふるべしと札をとりい」68ウ

でたまひければ綱はしるしを給はりて〳〵御

前をたつて出たる云々扱もわたなべの綱は只

かりそめの口論により鬼神のすがたを見ん為

に物のぐとつてかたにかけおなしけの甲の緒
をしめ重代の太刀をはきたけなる馬に打乗て
舎人をもつれず只一騎宿所を出て云々羅生門
の石だんにあがりしるしの札をとりいだした
ん上にたておき帰らんとするにうしろより甲
のしころをつかんで引とめければすはや鬼神
と太刀ぬきもつてきらんとするに取たる甲の「69才
緒をひきちぎつておほえずだんよりとびおりた
りかくて鬼神はいかりをなして持たる甲をか
つたとなげすて其たけこうもんの軒にひとし
く両眼月日のごとくにて綱をにらんで立たりけ
り綱はさわがず太刀さしかざし／＼汝しらず
や王位をおかす其天ばつのはるまじとてか

ゝりければ鉄杖をふりあげえいやとうつをと
びちやうどきるきられてくみつくをはらふつ
るぎにうで打おとされひるむと見えしがわき
つちにのぼりこくうをさしてあがりけるを云」69ウ
々前太平記には津の國渡邊の里より綱が伯母
のよしいつはり来てうてをとりもどせるよし附
會せり

○羅城門は天武記下卷八年十一月の条に仍難波

築「羅城」云々續日本紀十七の卷天平十九年六月

の条に已未於「羅生門」アマゴヒス 零 同書卅四の卷宝龜八年

四月戊戌の条に遣唐大使佐伯宿祢今毛人云々

到「羅生門」稱「病而留」云々三代実録三の卷貞觀元

年十月十五日の条に是日夜神祇官於「羅城門前」

修_二祭事_一為_二大嘗會祭_一故也云々同廿の卷貞觀十三_一 70才

年十月廿一日の条應天門火災之後修復既訖_二令_下

明經文章等博士議_中應天門可_二改名_一缺又名_二應天門_一

其義何據又朱雀羅城等門名義如何_上從五位上行

大學頭兼文章博士巨勢朝臣文雄議言云々称_二羅

城門_一者是周之國門唐之京城門西都謂_二之明德門_一

東都謂_二之定鼎門_一今謂_二之羅城門_一其義未_レ詳但大唐

六典注云自_二大明宮_一夾_二東羅城復道_一經_二通化門磴道_一

而入_二興慶宮_一為_二今榮_一其文勢_一蓋此羅列之意乎云々

朱雀羅城之義經典為_レ无_レ見焉云々同卅七の卷仁

和元年四月廿六日の条に修_二仁王會_一云々羅城門_一 70ウ

東西寺合三十二所及云々₉₀元亨釈書六の卷義空

傳に慧萼再入_二支那_一乞_二蘇州開元寺沙門契元_一勒_レ事

刻「琬琰」題曰「日本國首傳禪宗記」附「舶寄來故老傳

日碑崎」⁹¹于羅城門側「門檻之倒也碑又碎見今在「東

寺講堂東南之隅」云々日本紀略嵯峨天皇弘仁七

年の条に八月己酉夜大風倒「羅生門」云々兵範記

仁安二年四月廿三日の条に御方違行「幸鳥羽殿」

云々路次自朱雀門大路「經「羅城門」云々小世繼に

柏原の御門の御時に平の宮作らせ給ふあひだ

長岡の宮より時々行幸してあたらしくつくら」71才

る「都を御覽するにらいせい門のへんにて御

輿をとゝめてたくみをめして仰られけるやう

いとよく門はたてたり但たけなん一尺きるべ

き風はやき所にひとつ屋にて立たれは風のた

めにあやふき也云々さてつくりはて「都うつ

り近くなりてはじめのごとくらいせい門の前に
御輿をとめてたくみめして仰らるゝやう我は
はじめあしくみて一尺きれと仰てけり一尺五
寸ぞきらすべかりけるいま五寸きるべし猶たか
くみゆると仰られければたくみ俄にふしまろ」 71ウ
びおぢかんじ申やう此門のたけは一尺きれと
仰られしが仰のまゝに切てはむげにひきくま
かり成なんと思ひさふらひて五寸をきりてさ
ふらふ也それに合五寸と仰さふらへばはじめ
御覧しそこなひたるにはさぶらはず五寸かた
見て切さふらはずと申御門かしこく見てけり
こほちきらば宮こうつりの日近く来てえあは
せじさらばせであるばかりたゞし風⁹²にやとも

すれば吹たふされんと仰事ありけり云々さて

みやこうつりの後末の世に至るまで三度ばかり」72才

り吹たふされたりければ御門の御覧じたる事

かなひにたりいみじうおはしましけり云々さ

て／＼圓融院の御時大風に又吹たふさきにけ

り其後はつくりたる事なし云々伊呂波類抄五

の巻良の部に羅城門在朱雀南極今四塚是ナリ

云々拾芥抄中末巻宮城部に羅城門云々へこゝに三代実

録廿の巻の引たれと中略す件事又梗概出古賢勘草中但殿

舎門名號多依漢家之制各被付缺委出兩京雜記

等中云々又宮城門羅城門へ二重閣九間在朱雀大路南

門云々また羅城外二丈へ垣基半三尺丈行七尺溝廣一丈東西南北如此云」72ウ

々山城名勝志五の巻に羅城門云々土人云今四

塚町東^{ヅラ}頼民家後園礎石于^レ今相殘云々草盧漫筆

に羅城門ハ昔時大内裏ノ時平安城外郭南面ノ

正面ニシテ朱雀通へ今千本通へ九條大路ニアリ今、塚^(朱)₉₃ノ

民家東方ノ奥ニ礎石ノコルトカヤ云々大内裏

考證一の下巻に圖ありてもとはから國により

たる名也事物紀原六の卷京城の条に宗敏求東

京記曰周世宗顯德二年四月詔京城四面別築^ニ羅

城^ニ云々⁹⁴資治通鑑綱目五十一の卷に唐鑑咸通

三年十月高駢築^ニ成都羅城^ニ云々唐六典七の卷^工73才

部尚書の條に自^ニ大明宮^ニ東夾^ニ羅城複道^ニ云々唐書

三の卷高宗本紀に五年十月癸卯築^ニ京師羅郭^ニ云

々隱杭州羅城記に余始以^ニ郡之子城挾而且卑^{ヒキ、}遂

与諸郡^ニ聚議崇建^ニ雉堞^ニ後念^ニ子城之謀未^レ足以為百

姓計由^レ是鍔与^二十三部^一經^二緯羅郭^一云々⁹⁵秉燭譚五の
卷に平城⁹⁶朱雀ノ末ニ羅城門アリ遺址今ニ存在
ス固ヨリ名タカキ事也然トモ羅城門ト名クル事
明ナラザルヨシ拾芥抄ニ出ツ畢竟羅城ト云フ
ハ郭ト云事也羅城門ト云ハ郭門ト云事也平安
城ソノカミ盛ナル時四方ニ郭アリソノ南門也^一 73ウ
唐書に高宗ノ時築^二京師羅郭^一又通鑑唐懿宗紀ノ
注ニ羅城ハ外大城也子城内小城也亦朝鮮ノ雀
世珍ガ訓蒙字會云郭俗称^二羅城^一トコノ諸書ノ文
ニテソノ義明了也羅ハ周羅網羅ノ義ナルベシ
惣グルワノコトナリ云々などあるを考て羅城
とも羅郭とも通はしいひ城の外郭の名なること
もしるべし羅は羅列羅拜などの字儀にてつら

なりめぐるよし也さて羅城門の鬼の事は江談

抄五の卷詩語の条に氣霽風掃_ニ新柳髮_一氷消浪洗_ニ

舊苔鬢_ニ内宴春暖都良香_一故老傳云彼此騎馬人月夜遇_ニ羅_一 74才

城門_一誦此句_一樓上有_レ聲曰阿波礼_{ハレ}云々文之神妙自

感鬼神也云々へ十訓抄下の卷神道集九の卷東高絶東梅城録などに比説を載て上

の句を都良香とし下の句を羅城門上よりわかれたる聲にて鬼物のつけたるよしいへ
り

舊本今昔物語廿九の卷第十八語に今は昔摂津

国邊ヨリ盜セムガタメニ京ニノホリケル男ノ

日ノイマダクレザリケレバ羅城門ノ下ニカク

レテ立タリケルニ朱雀ノ方ニ人重ク行ケレバ_{シゲ}

人ノシヅマルマテト思ヒテ門ノ下ニ待立テリ

ケルニ山城ノ方ヨリ人共ノ數来タル哥ノシケ

レバ其レニ不^レ 見ト思テ門ノ上層ニ和ヲ搔キツ」 74ウ
キ登タリケルニ見レハ火髯ニ燃シタリ盜⁹⁷アヤ
シトオモヒテ連^{レンジ}子ヨリ臨^{リン}キケレバ若キ女ノ死
テ臥タル有其枕上ニ火ヲ燃シテ年極^フ老タル嫗
ノ白髪白キカ其死人ノ枕上ニ居テ死人ノ髪ヲ
カナクリ抜き取ル也ケリ盜人此レヲ見ルニ心
モ不^レ得子ハ此レハ若シ鬼ニヤアラント思テオ
ソロシケレトモ若^シ死人ニテモソアル恐レヲ心ミ
ムト思テ和ヲ戸ヲ開テ刀ヲ抜テオノレハトイ
ヒテ走り寄ケレハ嫗手迷ヒヲシテ手ヲスリテ
マヨヘハ盜人此ハ何ソノ嫗ノ此ハシ居タルゾ」 75オ
ト問ケレハ嫗己カ主ニテ御マシツル人ノ失給
ヘルヲ縁ノ人ノナケレハ此ニ置奉タル也其髪ノ

長ニ余テ長ケレハ其ヲ拔取テ鬘ラセムトテ拔
ク也助ケ給ヘト云ケレハ盜人死人ノ着タル衣
ト嫗ノ着タル衣ト拔取テアル髪トヲ奪取テ下
走テ逃テ去ニケリ然テ其上ノ層ニハ死人ノ骸
ソ多カリケル死タル人ノ葬ナド否不為ヲハ此
門ノ上ニソ置ケル此事ハ其盜人ノ人ニ語ルヲ
聞繼テ語傳タルト也云々など羅城門おそろし
き所のよし世にいひさだせるより綱が鬼を斬」75ウ
し事などかたりいでたるをやかて猿樂の謡曲
の詞に作りなしさて金札などの妄談にもおよ
へるなり羅城門のゆゑよし笈埃隨筆十の卷偽
説弁十の卷笠澤筆塵四の卷玉勝間十三の卷

雍州府志九の卷山州名跡志十八の卷京童二

の巻洛陽名所集十二の巻京羽二重織留一の巻
など所見いとおほく挙つくすべからず

○勅誼の誼の字心得がたしこは詔の字の言篇を
おもひまがへてふと書たるものなるべし誼は
音暄与諛同詐忘譁器などの義あれど宣詔の意」76才
は字書にたえてなし是も文無人が妄作せる證
なり

右一卷依平戸静山老侯之命所撰進也

第九保元物語作者時代

○参考保元物語凡例に保元物語世不_レ知_二何人所_レ

著醍醐報恩院所藏旧記云葉室時長作大外記中

原師香所_二手書_一上_二保元物語_一状云故師梁所_レ鈔師香

乃師梁子也云々尊卑分脉十四の巻閑院左大臣

冬嗣公七男高藤公の流に高藤七代孫大藏卿為

房二男按察使權中納言顯隆卿葉室一流の祖也」76ウ

顯隆弟に因幡守長顯あり其子中山中納言顯時

二男修理大夫時光子に時長民部權少輔從四位

上書ニ平家物語「其一人也云々また顯時四男に刑

部少輔盛隆あり改ニ名時光「其子時長民部少輔正

五位下平家物語作者随一也云々盛隆改ニ時光「而

依ニ白河院々宣「歸ニ本名畢云々かく兩度に出せる

は誤にて顯時の子時光時光の子時長なること

疑なし徒然草第二百廿六段には信濃前司行長

入道平家物語を作れるよし見ゆさて時長が叔

母は平大納言時忠卿室にて安德天皇の御乳母」77才

典侍なれば其時代押て知べしまた中原師梁は

系圖に掃部頭師蔭の三男師梁其子師香は師光
が兄掃部頭師干が養子にて大外記也時代は時
長よりもやゝ後輩缺管見記を考に同族三条中
原大外記師顯は弘安年中の人也系圖に大外記
師尚の長子師綱より師季師光師宗師蔭師梁と
續^{ツギ}て四代なり此等をおもふに時長師梁時代不同
なれど共に平家の世より已下鎌倉の中比已上
の間の人なり」七七ウ

右依「前壹州大守靜山君之命」所「考注」也

第十古寫經帙簀

○佛說菩薩內習六波羅經一卷紺紙金字奧書云
忠尊之分覺嚴云々帙簀當時之物裏紙亦古文書
也

○大明三藏聖教目錄卷第一單譯經部云菩薩内習

六波羅蜜經後漢清信士臨嚴佛調譯云々

○忠尊 二中歴第四豎義者條云忠尊へ卅四へ云々按

治暦承保永暦などの人の中に並べ載たれば覺

嚴と格別の前後あらぬ豎義者なるべし」78才

○覺嚴 二中歴第四云三會講師毎年十月興福寺

維摩會屈_ニ請諸宗学徒優長果_ニ五階_ニ者_上為_ニ講師_ニ明年

正月大極殿御齋會三月藥師寺取勝會等講師經_ニ

此三會_ニ者依僧綱_ニ云々覺嚴へ花東五十一へ云々按二花ハ

華嚴也東ハ東大寺也五十一ハ覺嚴か齡也天永

と天治元との間に載て其間十二三年なれば其

比齡五十一にて三會の講師にすゝみし人なり

○又云豎義者興福寺へ方廣 法華會 慈恩會 研学へ延暦寺へ廣学へ園

城寺〈碩学〉法成寺〈勸学〉已上勸物也 覺嚴〈卅〉云々

按に承徳元年の次永長元年の前に載て其間六」78ウ

年なれば承徳康和の比歳卅にて豎義者なりし

也

○又云天台宗三會延久四年圓宗寺始置法華取勝

會永曆元年十月法勝寺始置大乘會為三會覺

嚴〈康和元〉已上の文を考合するに覺嚴は始天

台宗にて後は東大寺華嚴宗の僧也堀河院鳥羽

院の御宇にて今に至ては七百四十年許昔の人

也

○帙簀 倭名抄文書具部に四聲字苑云帙直質反

字亦作裏書也兼名苑云一名書衣云々空」79才

穂物語蔵開の上巻に云ふみどもうるはしきぢ

すにつゝみて唐組カラクミの紐してゆひ机につみつゝ
あり云々源氏物語源氏物語の巻云御経よりはしめ玉
の軸羅のへうしぢすのかざりもよになきさま
にとゝのへさせたまへり云々同若菜の上巻云
ほとけ経ほとけばこぢすのとゝのへることの極楽ごくらくでお
もひやらるゝ云々細流抄云竹を簀スにあみたる
ふまき経をつゝむ物也云々河海抄云帙簀文卷フミマキ
也帙簀とは巻物のたけなるすのおもてに錦を
おしてへりをさして九異の緒をつけたるや経」79ウ
にかぎらず書籍等をも納物也云々源注拾遺云
ぢす今按日本紀に黄巻をフムマキとよめり帙
の事也されど経には帙といひなれてふんまき
とはいはず法隆寺の宝物を拝ける中にも此帙

簀いとふるくまぎれなき古代の物と見えたる

につゝめる経侍りき云々へ按に日本紀の黄卷は帙簀の事にはあらず

書卷の義也契沖が説ひかこと也〳〵仙源抄云ぢすのさま帙簀也竹

にてすを作て錦などにてへりをおし面にもつ

けてをゝつくる也経にかきらず書籍にも用_レ之

也云々一葉抄云ぢすのかざり竹をあみて経を」 80才

つゝむ也云々へ此外源氏物語の注釈共に見えたるは挙尽すべからず〳〵藻塩

草卷十七云ぢすのかざり帙簀卷物の上をつゝ

む物也竹をわりてあみたる物也又云経を

つゝむ物云々阿弥陀院宝物記に帙二枚雜綵云々安

齋隨筆麻久奈岐の卷云貞丈曰帙子と帙簀と異

也二ともに書を包む物也漢土より来る書の帙

子は紙を厚く糊して重ねて心_シにしたる也表も

紙或は羅絹などを用る也此方の帙簀は簾シを心

にして表を錦綾にて包む也云々倭訓栞十五の

巻知部にぢす源氏に見ゆ帙簀の義物の本など」 80ウ

包むもの也竹にて編アミて錦などの縁をとり或は

金欄などを裡ウラにし緒ヨを用たる也といへり一説

に帙子なるべしといへり云々南嶺遺稿四の巻

に書物の帙古来は竹にて編アミものにて竹を随分

細くしてこしらへたり源氏物語に竹帙と有是

にて書物を巻マキて置也その拵コシラヘザウ様しれざる所に撰

州川辺郡中山寺の西に清隆寺といふ寺土俗に

荒神山といふ先年井を掘とて一ツの銀の箱を出

す銀の四角の箱にて中に法華經十卷開卷諾卷

といふ物入て十卷有入道前太政大臣平朝臣清」 81オ

盛書と奥書有此十巻を細き竹を金の針金にて
編たる帙に入て有裏には錦を張てありたる体
なれども朽て見えず源氏物語の竹帙は是坎云々
類聚名物考調度部七にぞつ又云ぢすへ竹帙書
巻へふまきへ帙和名ふまきといふは書巻の意也書

のそこねもめぬために是にて巻おく也今唐本
または本朝にても厚紙にて作るは略也もとは
細き竹の簀也御簀のやうにあみて裏に絹錦等
を付て緒を付たる物也大原の来迎院に古代の
竹簀有また小野御縁起新調をつまれし帙は」
81ウ
近代の御寄附の物にて裏は錦子の緒付て金物
にてしめたる物也尤大和錦也その製様或は別
に作りて置ぬ是古代の文巻也ちすといふは竹^{チク}

簀の略語也後に南嶺遺稿を見ればめつらしけ

に比事を出せりうたかふへくもなき事也それ

は針金にてあみしは土中へうつむ■⁹⁸経ゆゑの

事也つねは糸にてあむ也云々好古録下巻云羣

碎録云書曰「帙者古人書卷外必首帙藏之如」今裏

袱之類「白樂天嘗以」文集「留」廬山草堂「屢凶送宗真

宗令」崇文院写校「包以」斑竹帙「送」寺余嘗于「項子京」82才

「家」見「王右丞書畫一卷」他外以「斑竹帙」裏「之云是宗物

帙如」細簾「其内襲以」薄繪「觀」帙字巾旁「可」想也「按香祖筆

記引」之艸堂作「東林寺項子京家作」秀水項氏「此間數百年ノ竹帙存ス

ル者アリ俗ニ帙簀ト云内襲或ハ錦繡或纈纈ヲ

用フ美麗眼ヲヨロバシム古昔佛經ヲ尊ビ数千

卷トイヘドモ皆竹帙ヲ用テ此ヲ藏ム又竹帙皆

牙籤ヲ用フ今存スル者少シ東寺校倉中ニ希ニ

存スル者アリ云々言鯖録上卷に書曰帙古人書

卷外又有帙藏之音帙如「今裏袱之類」以「細斑竹為」

之帙如「細簾」裏以「薄繪古人書画類多」班竹帙「今大」 82ウ

内藏「晋唐真蹟」多用之云々「按裏袱は今の唐本の帙をいへる也」

○包紙の反古當時の物古色愛すべし文中に今日

一切経衣服事○人夫役○大夫法眼上役之時人

夫二人○右京○弁法眼分○弁得業○如用人夫

○大師尺者是有二尺中不正義也などいへる語

見えたり

右古写佛経及帙簀考者文政四年九月廿三日所

納「於武藏秩父三峰山寺也」寺之前住日俊僧正相

識之故有此事「矣

第十一掃墨」 83才

○和名抄膠漆具部に掃墨功程式掃墨一斗合_二酒

二升膠二兩_二和名波伊須美云々

按膠二兩とあるは廿兩の誤にやハイズミハ

ハキズミの音便にて松烟を掃集めたるまゝ

の墨のよしなるべし練堅し墨に對し名也

○延喜大神宮式に鷄尾琴一面惣所_レ湏云々掃墨二

升云々

按鷄尾琴を造るにも掃墨を用し事知べし延

曆儀式帳にも見ゆ

○同内匠式に手湯戸一口へ周五尺八寸五分高二尺五寸五分蓋一枚」 83ウ

へ周三尺五分料漆三升掃墨五合質布九尺綿一斤四兩

絶布各一尺二寸油二合功五人大半

按手湯戸テ ユベは手水テウツの湯をユいるゝ器也サヨミ質布フタと綿
は漆コスレウを漉料也アシキヌ 絶ヌノと布も漉料缺拭料ノゴフなるべ
し油は漆に加事也油二合の下に炭一斗など
ありけんが脱たるなるべしこれ掃墨スミを用て
今の100カキアハセに塗スリたる也掃墨は炭スミを細末
せしにて上品を今軽目カルメ¹⁰¹といふ洩墨シテスミに用るは
いとく下品なる炭粉也功五人大半とは手テ
間五人半也といふもあり小半は小半日也さ」 84才
て此次に水槽ミツフネ手洗槽タラヒバネ大椀中椀盤窪坏ウボツキなど掃
墨スリにて塗スリたるよし見ゆいづれもカキアハセ
塗102なるべし今の蠟色は鉄漿を漆に和て塗物
にて別也

○同式朱漆器の条に臺盤一面へ長八尺廣三尺三寸三分〆料漆一

一斗一升二合朱沙一斤四兩帛ハクノデマ四尺綿ワタ三斤十二

兩サヨミ質布二丈調布ツキノキヌ六尺掃墨二升油二合小麦一升

青砥伊豫砥アラトイヨトへ其數隨用下条不名顯レ顆數レ者所准レ此炭一石長功卅八人

中功四十四人短功五十人云々

按朱漆にも掃墨を加て黒色を帶クロイロさしむるな」84ウ

り今も唐物に黒色を帶カラモノたる朱器おほし帛オビはハクノキヌ

薄繪也調布は民戸より輸ウスす布也帛錦質布調イタ

布などは漆などを漉コし或は塗ヌリ下地シタなどにも

用しなるべし麦は未詳青砥伊豫砥は啄磨トギミガキの

用也炭はあたゝめ乾カワカす料也長功は長日キの工ク

功短功は短日デマの工功長短の中間を中功とい

ふ四五六七月は長功二三八九月は中功十十一

十二正月は短功なるよし營繕令に見ゆ此次に

臺盤臺盤臺花盤飯碗羹碗擎子盞盤などの朱

器にも掃墨クワヘを加スルて塗ニカハよしあり兵庫寮式に掃」 85才

墨に酒膠ニカハを和スルせて塗スルことも見ゆ

○同民部式下年料別貢雜物の条に播磨国掃墨二
石云々

按掃墨いづくよりも出イダすべけれど別貢せし

は播磨国也堤中納言物語續狂言記掃墨など

の掃墨は女の黛に用る菰くろめの事をいへ

りと見ゆ

右平戸城主壹州静山君有レ命而使レ者立ニ於松門一廻

倉卒考注而進上者也

第十二答「於畠山常操」書」 85ウ

○御不快と承候處御快方奉賀候物

鷹に紅葉生モミヂといふ事かやとの御問の旨承候

間一二条ケ記し入御覧候

○定家卿鷹三百首附録に鷹部哥に「時雨ゆく秋

の山ぢの紅葉生モミヂの鷹もてそめてかへる狩人云

々

按群書類従本にはもてはまで缺としるして

候

○曾我流鷹文字に紅葉毛生モミチ紅葉生モミヂ定家卿哥「しぐ

れゆく秋の山ぢの紅葉生モミチの鳥もきはめてかへ」86才

る狩人注に赤毛生アカモをしかいふ按鳥は鷹の誤也

鷹もてそめてを鷹もき初てとすそしかるべき

○唐流鷹秘決第卅則に紅葉生モミヂ乱生フミタレ丸生フマロフ十所生トコロな

どいふ事あり不_レ決云々

○鷹名集に紅葉生モミヂナフ云々

これらの外いくらも所見おほかるべく候へど

も実に惚怳中不_レ能_二搜索_一唯一二説抄出したし候

夫木抄藻塩草など其御方にて御見合可被成候定

家卿哥の古注に紅葉生モミヂナフは赤毛生アカカフをいふよしあ

れば然御心得候てよろしく候されど赤毛生アカカフ赤アカ 86ウ

生フアカシロフ赤アカ黒生クロフなといふ名目も候へば御心得

可被成候定家卿鷹三百首は古書に候へどもこ

れは前人の依託のものに候書餘来春拝顔可申

上候不備

第十三阿波殿御庭拝見記

阿波淡路のふたくにふさねしらすかうの殿は
かち橋の大御館に新き御殿つくりそへたまへ

るかひろくまひろくいかめしくかねに玉に
かされる黒漆丹うるしぬれるうつくしき花鳥
のかたちをゑれるあらましき海山のさまをゑ」 87才
かけるそのめてたさたふとさことはにもつくし

かたく筆にもおよひかたしれうの本竹も石尾
もみなかのしりたまふ國よりもし舩手舩にと
りつみ八重のしほちをはこひもてきたくみも
ちぶはたかしこよりめされし民にて身もたな
くすいそしみたれははつかなる月日のほとに
かうしたゝかなる御殿をもつくり出たなりと
そゝもろゝの直きをあくる雨なれはむへすみ
なはもたゝしかりけり廣庭にえもいはぬ松を
うゑられたるもとに立よりてゝしはしたに立」 87ウ

よる今日のうれしさや八千代さかえん松の下
かけおのれかゝるかしこき御あたりを見ま
ゐらす事今御館のつかうまつり人廣岡ぬしの
請ゆるされたなるにてもとよりの御殿の御庭
のさまをもいかてなといはれしを今日はさは
りてかなはぬよしあつかりのいへば力なし
さて廣岡ぬしの家にてものたうへなとしたる
ほと御庭にまゐるへきよしにておもと人門よ
り出ておほせらるゝむねありかうの殿かねて
より与清かあらはしゝきかし見そなはしつる」
に御心になかひまた御史のをりくからかへ
たゝしつる書なとたいまつりしを御らんする
こひたまひて人にもゆるしたまはさりし御つ

88才

ほのうち水車のさまなとをもみよとの御けし
きありしよしをうけたまはるにまことにいやし
き身にも文の峰わけはやとおもひ立るかひあ
りてとかたしけなくもたふとも袖さへせは
き心ちせり木たくみのことうけたまはりおこな
ふ七濱のなにかしたくみ出て水車をかまへひ
きしところより水を二丈あまりあけて山より「 88ウ
瀧をおとしたるはいにしへ今にためしなきわけ
なりやゝいにしへもかゝるたくみはしら糸にま
かひておつるたきの水かな池のおもにをしう
かひゐたりゝ是も又君かめくみのいとふかき
いけるかひそとあそふをし鳥阿波の鳴門より
とう出られしといへる立石ありゝそこふかき

鳴門の石もとり出てはこふやかみの力なるらんかしこき御たまひまひてこゝかしこみめくりまつりしは文政十年十二月の十三日也けり

103

第十四つぼく 89才

茶人千宗易がしそめたんなりとてつぼくといふ文を調度の蒔繪にもし障子屏風壁天井など形にも押などして茶室の物好といへりこは稲荷山にて田寶と名づけて賣れる土器なり土を圓き壺の貌に作りて干堅めし物なるを買い人家にもて歸て三寶荒神に手向まつることゝす文政六年の比京都堺町御門の東六角殿の敷地の内柳馬場より行あたる跡にて古き田寶を甘ばかりほり出たるに口の弘さ一寸餘にて布目あ

り近き世の物とは見えざりしとなん按に田寶」 89ウ

はもと初午ハツムマの福フクまゐりに稻荷山の土ツチを得て帰カヘリ

ておのが田にまき散チラし年トシのよく登イらんことを祈

るわざせしを聴てその土を壺にとりなし五穀

の種をいれて田に祭り田寶とは名おほせしな

るべし¹⁰⁵つぼぐといふよしは新撰犬筑波集の

句にもゝもてあそびぬるるりのつぼくとも有

て壺ツボを多く集アツめて物の文モンにすればさよぶなん

かし

右壺々考所奉阿州侯也

第十五櫻間池」90オ

○夫木抄〈雑五〉に題不知〈懷中阿波〉よみ人しらずゝ鏡

とも見るべき物を春くればちりのみかゝるさ

くらまの池 ¹⁰⁶ 按懷中と注したるは古き書名に

て西三条の懷中抄にはあらず櫻間の池は倭名

抄〈國郡部〉に阿波國名方西郡櫻間〈佐久良萬〉あればその

郷の池也今は名東郡に隸ミヤウドウコホリ ツキムラて村の名となれるよ

しは阿波國圖に見ゆ續日本紀〈廿八の卷〉神護景雲元

年三月の条に乙丑阿波國板野名方阿波等三郡

百姓言日云々三代實錄〈十三の卷〉貞觀八年十一月の

条に廿五日丙寅勅阿波國名方郡加置主政主帳」90ウ

各一人云々倭名抄〈南海郡部〉に阿波國府在名東郡一本

是名方郡也今分為東西二郡云々名東名西云々

類聚三代格昌泰元年七月十七日大政官符に應_下

省名東郡主帳一員置名西郡事右得阿波國鮮稱_{イハク}

名西二箇郡元為一郡之時置二件職一員而依二大政

官去寛平八年九月五日符旨二分爲兩郡一七箇郷爲二

名東郡一四箇郷元爲名西郡一而未^レ置^二此職^一已違^二令條^一望

請官裁省^{ハフキ}二彼一人^一爲^二此郡員^一者^{テヘレバ}国加^二覆覈^一所^レ申有^レ

謹^テ請^二官裁^一者大納言正三位兼行左近衛大将藤原

朝臣時平宣奉^レ勅依^レ請云々延喜民部式首書に寛^二91才

平八年九月五日分^二名方郡^一爲^二名東西郡^一云々など

あるをかうがへわたして名東名西分置の時代

を知べし^{チナミ}因に云阿波國の名所の古く物に見え

たるは粟門^{アハド}〈神代紀上〉淡郡^{アハノコホリ}〈神功紀〉長邑^{ナガムラ}〈允恭紀〉春日部屯倉^{カスガベノミヤケ}

〈安閑紀〉長国^{ナガノクニ}〈国造本紀〉勝占〈神名式下〉井限驛^{キノクマノウマヤ}〈兵部式倭名抄〉那縣驛^{ナガタノウマヤ}

〈兵部

式和名抄〉桑乃御厨^{クハノミクリ}〈神鳳抄〉阿波乃山^{アハノヤマ}〈万葉集六〉粟小嶋^{アハコシマ}〈同集九〉こ

つがみの浦〈後拾遺雜五〉中湖^{ナカノミナト}〈風土記万葉仙覺抄四卷及五卷所引用〉奈汰^{ナダ}

〈風土記仙覺抄五卷所引用〉勝間^{カツマ}の井〈風土記仙覺抄十四卷所引〉阿波^{アハ}の鳴^{ナル}
門^トへ夫木抄雜五同十八〉里^{サト}の海士^{アマ}へ夫木抄夏二歌枕名寄卅四〉などにかあ
らん」91ウ

右櫻間池考所^レ奉^ニ行阿淡兩州太守君^一也

第十六答於澤近嶺之問

○後撰雜曰¹⁰⁷よみ人しらすゝみちのくのをふちの駒

も野かふにはあれこそまされなつくものかは

蜻蛉日記ゝわれか猶をふちの駒のあれこそ¹⁰⁸なつ

くにつかぬ身ともしられぬ後拾遺雜二相模ゝつ

なたえてはなれはてにしみちのくのをふちの

駒を昨王¹⁰⁹見しかな次郎百首兼昌ゝきほひつるを

ふちの駒のさきたちてかつみる人も悲しかり

けり奥義抄中上卷へ六段〉に後撰に陸奥のをふちの」92才

駒も云々は駁にはあらず陸奥にをふちとい

ふ所よりいてくる馬をいふ也云々又中下卷へ廿四

段¹⁰にをふちとはみちのくにゝある所也云々袖

中抄廿の卷に顕昭云みちのくにゝをふちとい

ふ所の名きこえすたしかにたづぬへし云々八

雲御抄へ五の卷へ牧の部にをふちの牧陸奥云々藻塩

草亦同舊蹟遺聞三の卷に尾駁牧は北郡の東の

海邊に此牧の名残れり云々陸奥國圖に北部に

ヲブチ沼あり以上の説に據れ地名ときこゆ

されと延喜馬寮式に陸奥の牧の名なきは疑は」92ウ

し

(9行空白)

松屋外集卷之一終」93才

1 も「天妃」。

2 も「下」。

3 も「ノ」ナシ。

4 底「第十三く拝見記」*も「ともとてなと云べき詞をとゝのみいひし例」。

5 も「ぼ」。

6 も「をぶちの駒」(改行挿入)。

7 も「古版本」。

8 も「○東大寺要録四の卷諸院章東西小塔院条

に神護景雲元年丁未造^ル東西小塔堂^一實忍

和尚所^レ建^ル也天平宝字八年甲辰秋九月十一

日孝謙天皇造^テ壹百万小塔^ヲ一分^ニ配^ス十大寺各籠^ム

無垢淨光陀羅尼摺本^一へ口傳云惠義乱誅之聞懺海^{料也}

按に東大寺要録十卷あり長承三年

八月十日東大寺僧觀嚴集^ム之建保二

年九月八日於^テ慈恩院^ノ閑亭^ニ走^レ筆書

レ之釋事阿といへる奥書あり」(改行)

9 も「摺本寫本」。

10 も「益」ナシ。

11 も「給へり事」。

12 も「法然之」。

13 も「按に日蓮書録内録外の中に選擇集印板の事あまた見ゆ」(改行二字下げ挿入)

14 も「○義堂空華集五の卷へ卅三丁左」重開^テ金剛經板^一

化縁偈頌叙に瑞鹿續燈禪菴所^レ藏金剛

經舊板^ハ乃本庵第一祖佛滿禪師書^也也當^テ

甲寅、冬^ニ為^ニ八人^ノ所^ル奪而後於^ニ灰炉^中獲^ニ舍利^如。菽者無^レ數^レ此^レ。蓋般若薰力^ノ不可思議^ナ」

者也。三年歲直^ニ丁未^ニ。師之徒惠從道人^ノ発^シ

心化縁^欲。重^テ繡梓^以行^ニ。於世^一。故命^ニ報恩^ノ比

丘某甲^ノ説^レ。偈代^ヘ。疏^ニ遍^テ于^ニ諸賢檀越^一。以集^ナ乃^ソ

事^一。此去逢^ニ著^ノ知青^一。開^テ顔^ニ一笑^{スル事}。則般若惠燈

增^レ輝燦爛續々無盡矣。偈曰。般若薰陶

弗^レ不^レ量。炉餘設利燦^{タリ}。晶光^ニ要^{セハ}識^{ント}。金剛元^ト

不壞^一。還^テ須^カ鏤^テ版^ン再^ヒ宣揚^{スルヲ}。

○同書、十二卷、^ハ廿四丁^右、佛光師祖留^{スル}二題^一、清見^カ

関^ニ一唱和板首序^ノに光祖始^テ以^ニ蒙元^ノ至元^ニ已^一

卯十六年起^ニ天童^ヲ來^テ應^ス。日東福山之命^ニ實^ニ

本朝後宇多朝弘安二年八月也。道經^テ清見

關守一偈爾成^{トシテス}章曰^{ヲク}暫歇^{ヘテ}征鞍^ヲ此地遊同看^ル
廣岸一沙鷗欲^{スル}留^ニ姓字^ヲ無^ニ新句^ヲ馬上頻頻^{トシテ}
只轉^ス頭後^ヲ之名德廣載^{スルコト}不^レ可^ニ勝^テ紀^ス但未^レ有^ニ
板刻者^ニ可^レ惜也應安戊申無^ニ一公適^ク主^ニ茲^ヲ
山一有^ニ祖風烈^ヲ得^ニ名德和章真染^ヲ者若干篇
將^下附^ニ本韻^ニ而板刻^{セント}之^上遂續^ニ乃韻^ヲ自題^ス板尾
且^ツ空^ニ其^ヲ右^ヲ以俟^ニ後之隨^ヲ得^{ルニ}而填^{ルヲ}焉次^ノ年夏公^ヲ
屬^{シテ}旭姪^ニ俾^ニ余^ヲ為^レ叙謹案^{テスルニ}弘安二年^{ヨリテ}至^レ今僅踰^ニ
九十二祀矣而^{シテ}乃吾祖^{カヲ}之廣和獲^レ刻^{コトヲ}於無^ニ
之手^ニ可^レ謂^ク貽厥^ト矣云々

○同書十八卷へ廿丁右〳新刊貞和集跋に此書ハ
乃余貞和間在^ニ京師龜峰^ノ所撰諸祖偈集
也其^ヲ偈初數千首后刪成^テ三卷^ト共収^ニ一千五

百首^一仍^テ命^シ曰^二貞和集^ト而^{シテ}假^ニ筆^ヲ向陽谷^{トモ}者^ニ楷
書^ス一本^一欲^{シテ}鏤^ニ諸梓^ニ而流^中通^{セント}之^上會^ヲ戊戌春遽
爾^{トシテ}為^メ祝融^一所奪^ノ其本遂成烏有^ト矣今此印^一

本乃未^レ刪以前^一稟本也不^レ知何家俗士鬻

利^ヲ者妄^ニ寫^シ且刊^シ烏焉成^レ馬不^ニ持^セ成^レ馬或脫^シ

一字^一或漏^ニ一字^一或全篇失^レ次其錯誤不^レ可^ニ

勝言^テ余適^一欲^下重^テ加^ニ校讎^ヲ改^セ刊^上未^レ暇^{アラ}也今承興^テ

國室翁^ノ命^ヲ一俾^レ整^ニ理茲編^一不^レ免輒加^ニ塗竄^イ遇^{サハ}

其疑者^一則但加^ニ朱點^ヲ以俟^一好本也噫金銀妄^ニ

改千古胎^ス笑余恐^ハ它日興彼妄刊者併案^{セラレシ}事^ヲ永

和改元^一夏云々^一。

15 も 「同書」。

16 も 「同卷へ廿七丁左」新開^ニ「佛祖統紀板」募緣疏偈^ノ

序に普趙宋南渡景定間四明東湖沙門」

天台講師安石磐公撰^ス佛祖統紀^ヲ益擬^{シシテ}諸兩^ヲ

司馬史記通鑑^ニ而作也其書五十五卷九日^ニ

佛應莢葉之本支衡台諸師之旁正儒釋

道之所^ノ以興替^{スル}一禪教律之所^ノ以並行^{ハル}一法運世

界之所^ノ以通塞建立^{スル}之者一開^{ニスハゲ}卷則粲粲^{トシテ}

羅^ス列^ニ目前^ニ若^ニ星斗^ノ縣^カ于秋旻^ニ莫^レ不^{ト云事}昭然^{ラス}故三^ニ学

稽古之徒咸有^ク取^事焉而吾國未^レ有^カ三板行^{スレ}者一初

前晋門住持則川三公禅学之餘欲^{シテ}梓^{セント}茲

書^ヲ不^{シテ}遂而寂及^テ是其上足比丘南禅雲莊」

書記生會一日慨然^{トシテ}欲^{シテ}成^{シテ}二鉅事^ヲ一以畢^{ント}先志^ヲ上厥^ノ

費頗夥^シ非^ス資^{ハルニ}衆力^ニ則難^{ナリ}集^{シメテ}乃俾^ニ余製^セ疏巡^ヲ

化^{セントス}余嘉^{シテ}三雲莊^ノ克繼^{事ヲ}厥志^ヲ辭^{スル事}弗^レ獲遂^ニ一偈以代^ニ

四六一「仰^ニ于^テ十方英檀^ニ」僧俗男女随^レ意^ニ樂施

成就^{スル事ハ}則^ル異時佛祖彼何人哉^{ソヤ}」（改行挿入）

17 も「○半分陶稿^ノ一卷^ノ（廿二丁左）一忍榮勝居士^カ盡七香語

に頼亮特抽^{ニテ}法華要品^ヲ一命^シ工摺写^{ニス}焉壽量

普門^ノ二品親書^{ハヲスルノ}者若干遍以^テ為^レ儼^{ント}矣云々」（改行挿入）

18 も「○傳法正宗記跋^ノ弘安十年丁亥謹題云々」は註27の箇所にある。

19 も「刪傳」。

20 も「明信云々」。

21 も「○」ナシ。

22 も「奉請根本」を次の割注に含む。

23 も「寛喜二年」ナシ。

24 も「なと」ナシ。

25 も「寶」。

- 26 も「以」ナシ。
- 27 も（空格）。
- 28 も、ここに註18の文あり。
- 29 も「○同跋」。
- 30 も「いつの比く見えず」ナシ。
- 31 も「○類聚名物考」。
- 32 も「泰浩」。
- 33 も「○」ナシ。
- 34 底では（ ）内頭書。もは本行。
- 35 も「が」。
- 36 も「盛日尚未盛」。
- 37 も「また淮南子の秦族訓に姦刻の偽書の字面も見ゆ」（挿入）。
- 38 も「子」_二（挿入）

- 39 も「さとらざりし」
40 も「はた」。
41 も「○神代紀上」
42 も（次行の文章、○ナシで追い込みとする）。
43 も「去^{サル}をいふ事は」
44 も「ま」。
45 も「離」ナシ。
46 も「て」。
47 も「これのれ」。
48 も「帝」。
49 も「琉球記」。
50 も「而作」。
51 も「所」ナシ。

- 52 も「ママ」ナシ。
53 も「ママ」ナシ。
54 底「恐稽」の左に朱圈点あり。
55 も「時刻」
56 も「廣泉新語六卷神語部」(挿入)
57 も「神名」。
58 も「神祇」。
59 も「月日の山」。
60 も「木綿」。
61 も「言此頭弁懈怠也」。
62 も「與」。
63 も「○」ナシ。
64 も「の」

65 も「のみにも」。

66 も「金鼓」（かなくち）

67 も「今多摩川」。

68 も「舊事紀」。

69 も「八朔」

70 も「名神」。

71 も「淮南子精神訓注に總合^也とも見ゆ」（挿入）

72 も「七遍」。

73 も「へ久安四年二月十七日の条」に法成寺惣社云々又へ久安六年八月廿四日条」於^テ

法性寺新造堂^ル被^レ行^ハ惣社祭^ヲ新尊^ニ崇^ニ之^ヲ云々又」（挿入）

74 底「又へ寛文二年八月廿二日の条」始行^ニ祭禮云々」Ⅱも「又へ安元元年十月

三日の条蓮華王院の惣社祭云々又へ建久五年九月九日

の条」法成寺の惣社祭云々又へ正嘉元年十一月二日の条」淨

金剛院の惣社迂宮也云々」。

75 も「太平記へ廿一卷」に法勝寺の惣社云々」（挿入）。

76 も「平泉鎮寺」。

77 も「悉」。

78 も「北条九代記く社領ヲ付ラル云々」註78に続く。

79 も「吾妻鏡へ六の卷十六丁右」に於^{ケハ}東海道^ニ者仰^セ守護人等^ニ被^ル注^セ其国總社并國分寺破壊及同尼寺顛倒事等^ヲ是重被^レ

經^ニ奏聞^ヲ隨^テ事^ノ體^ヲ為^レ被^{シガ}加^ハ修造^ヲ也云々」（挿入。註77の文が続く）。

80 「後にはく心得て」 〓 も「と見えされば此の比よりやうやく独立のさまにやなりにけん」。

81 も「宣胤卿記」。

82 も「とも見え」。

83 も「類聚国史へ五十二の卷百卅七の卷」河薺國志」

84 も「一宮」。

85 も「万葉記」。

86 も「書紀」。

87 も「書紀」

88 も「柳宮□□公」

89 も「へくも」。

90 も「官衛令へ義解本二丁左」に京城門^ハ

者云々義解に謂羅城門^也也云々集解

に釈云羅城門^ニ謂^ハ之^ヲ京城門^{トナレバ}何^一者衛禁

律云越^ニ京城垣^ノ者徒^ヲ一年又条越^ニ坊市^ノ

垣^一者苔五十故坊門亦随^ニ羅城門^ニ開^ク耳云々^ノ（挿入）

91 も「碑峙」。

92 も「やゝ」。

93 も「今塚」。

94 も「南史」へ六十

三卷〕王僧辯傳に元帝以僧辯為征東將軍
開府儀同三司江州刺史一封長寧縣公一命即
率巴陵諸軍沿流討景攻校魯山一仍攻郢
即入羅城云々

95 も「制度通」二卷へ五十三丁右都

邑坊城並皇城官城門号事条二羅城ト

云コトソノ義詳ナラザルヨシ三代實錄拾

芥抄ニモソノ説アリ羅城ト云ハ總曲輪ノコト

ナリ通鑑唐懿宗紀ニ不移時克羅城彦曾

退保子城ト云々胡三省力注二羅城外大城

也子城内城也ト又唐書高祖本紀二築京

師羅郭^ヲ起^ツニ觀^ヲ于九文^ニト明人ノ湧幢小品ニ南

京外羅城ト云々朝鮮ノ崔世珍カ訓蒙字

會ニ郭ハ俗に称羅城トコノ諸文ニテ羅城ノ

義アキラカナリシカレバ平安城ノ羅城門ハ

京都總グルワノ門ト云コトナリ羅俗ノ義

ナルベシ又日本書紀ノ天武天皇八年十一月

難波ニ築ク羅城を云々コノ時分スデニソノ

名アリト見エタリ云々」(挿入)

96 も「平安城」。

97 も「盗人」。

98 土編に夾下に土の字。もと底同字。「埋」と同義か。

99 も「ハイズミハハキズミ」

100 も「カキアハセ」。

101 も「今俗輕目」

102 も「カキアハセ塗」

103 第十三、底本とも本と異なる。も本を次に翻刻する。

第十三ともとてなどいふべき詞を

とゝのみいひし例

されどもをされとしかはあれどもを

しかはあれどなどいふ類はともを省

てとゝのみいへる也蜻蛉日記上卷へ解

本二卷廿四丁右へ歌に

あらしのみ吹める宿は花薄ほに

出たりとかひやなからん次郎百首

不見恋に兼昌

わきもこにあふみなりせはさりとわ

れふみも見てまし轟の橋また妓女

に仲實

絵にかくと筆も及ばし女子か花の

すがたをたれに見せまし金葉集へ七卷へ恋の

上に重服になりたる人の立なからまう

でこんと申たりければつかはしける

橘俊宗女

立ながらきたりとあはじ藤衣ぬき」

捨られん身ぞとおもへば新古今集

へ十三卷へ恋三に恋の哥とて太上天皇

たのめずは人をまつちの山なりとね

なましものをいざよひの月枕草子へ春曙抄二卷十

二丁右へにあいぎやうなくことはしるめ

きなどいへばいはるゝ人もきく人もわら
ふ云々これらはともを省くとゝいへる也
又古今集へ一巻へ春上に貫之

くるとあくとめかれぬものを梅の花いつ

人間にうつろひぬらん曾丹集十一月上に

やぶかくれきゝすのありかうかゝふと

あやなく冬の野にや立つらん蜻蛉日

記下巻へ解環本下五卷二丁左に

わが袖はひくとぬらしつあやめ草人

の袂にかけてかりかせこれらのとはとて

を省る也此外證おほかれどわつらはしさ

に引出ず右所答_二於畠山梅軒之問_二也

104
も「夏の比」。

105 も 「神祇拾遺には倉稻ノ縁ニ依テ陶器黍粟ヲ求テ第一トスと見ゆ」。
 106 も 「○」。
 107 も 「雜四」。
 108 も 「あればこそ」
 109 も 「昨日」。
 110 も 「へ廿四段」。

梅田 径

1984年生。日本学術振興会特別研究員PD。

単著『六条藤家歌学書の生成と伝流』（勉誠出版、2019）。

ほんこく まつのやがいしゅう まきいち
翻刻 松屋外集 卷一

令和五年三月十五日 初版第一刷

おやまだともきよ うめだけい
著者 小山田与清編著、梅田径編

発行者 梅田径

〒252-0141

神奈川県相模原市緑区

相原3-22-2

kei.umeda@gmail.com

ISBN 978-4-910510-78-1

発行所：オリンピック印刷株式会社